
非現実の現実

蒼炎鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非現実の現実

【Zコード】

N7453A

【作者名】

蒼炎鬼

【あらすじ】

これは、運命を変えられた者達の物語

第一話・日常（前編）

以前同じものを書きましたが都合によつ改正させていただきました。

くだらない……）

僕は、机に肩肘をつきながら思った。

（数学の方程式式に何の役に立つ？歴史を振り返っても人間は同じ事しかしない）

だが、国語の授業中に考えても仕方が無い。

キーンコーンカンコン（このチャイムはどうにかしるよ……）どう考へてもリズムがずれているチャイムが鳴る。

「起立。礼」

授業が終わつた。その矢先に、

「蓮崩 れんぼう ちょっと来い！」

俺の名前だ。

「お前、進路はどうするんだ？お前だけだぞ。決まってないのは！」

先生が怒りながら言つ。

俺はもう中3だ。3年にもなつて、進学先も考えずに遊んでいる。いわば、落ちこぼれだ。

「ああ。そんなことつすか」

俺は他人事のように言つ。すると、

「そんなことだと！ふざけるなよ！」

先生がキレた。先生の怒号が教室内に響きわたる。

（そんなことでキレんなよ……）俺は眩ぐ。

「もういい！先生はお前の進路には一切干渉しない。わかつたな？」「はあ～い

俺は馬鹿にしたように言つ。

まあ、実質本当に進路は決めねばと焦つてゐるのだが、俺はあの先生が嫌いだ！

「先生どうじよつ～」

なんて聞くなら死ぬ！

「ダイジョブ？蓮崩」

話し掛けてきたのは、幼稚園からの幼馴染の聖 しょう だ。名前は男みたいだがれつきとした女。俺もお年頃なので、女には興味が湧いてしまう

「まあな。つたくあのオヤジすぐ切れやがって！」

俺は先生に対する愚痴を言いつ。すると

「いや、あれは蓮崩が悪いと黙つわよ？」

聖が言いつ。

「う・・・まあそっかもしれないけど

なぜか、聖には嘘はつけない。と黙つめひつ逆らえない。

幼稚園の時に一度逆らつたり・・・

・・・あれは封印しておこいつ。

「ああ～。なんか面白え事ねえかな～？」

この何気ない言葉が、俺の運命を変えることになる。

第一話・日常（後書き）

「」の小説を読んでの「」感想をお待ちしております

第2話・不安

「聖！」「

大声を出して俺は起き上がつた。

「わつ！…なに！？」

俺と同じ年くらいの女の子が驚いてこっちを見る。

「あれ？俺なんでこんなところで寝てんだ？確かに…俺は、なぜここで寝てるのかを思い出す。

「なんか、面白えことねえかなあ～？」

と思った。そしたら教室が夜でもないのに暗くなつて。気づいたら、どつかの平原に落ちて…。
(そこからどうなつた？)

俺が思い出してる最中に女の子が話かけてきた。

「ダイジョブ？」

女の子は心配そうに話す。

「頭がフラフラする…」

俺は意識もまだハツキリしていない。

「はい。水」

女の子は水を渡してきた。

「ありがと…！！！」ガツ！…なんだこの水！…？」

あまりの水の苦さに吐き出す！

「アハハッ ホントに飲むなんてね」

女の子は無邪気に笑う。

(この女…泣かすぞ…！)

これが、俺の頭に思つたこの女の子の第1印象だ。

「あ、そうだ。あたしはプエル。あんたは？」

「蓮崩…」

怒りを抑え話す。「レンホウ…珍しい名前だね」

プエルは虎視眈々と話す。

(珍しい？おれからすりや、 プエル つて名前が珍しいけど・・・)

(ここって、 外国か？)

様々な事が頭に浮かぶ。

「ところで、 なんでレンホウはトルナ草原に倒れてたの？」
プエルが言う。

「トルナ草原？ なにそれ？」

俺は、 意味がわからずプエルに聞く。

「え・・・？ 嘘でしょ？ なにって・・・」

プエルは驚きの表情を隠しきれていない。

「いや、 だからトルナ草原つてさう・・・」

俺は聞き返す。

「もしかしてあんた、 異界人？」

プエルが困惑の表情で俺に聞く。

「は？ バカ？ 俺は日本人」

おれは、 すぐさま言い返す。

「二ホンジン？ あんた、 レヴェル人じやないの？」

プエルが言う。

「は・・・？」

気まずい沈黙が一人を囲む・・・

第3話・クローマー

「 まだに、長い沈黙が続いている・・・
(そういうや、この世界の仕事ってどうなつてんだ?) 俺がそう思つ
た矢先に、プロエルが口を開いた。

「 そついや、レンホウ。あんた仕事はどうするの? 」
「 どうするの? つていわれてもどんな仕事があるんだよ? 」
「 俺はどんな仕事があるのか知りたかった。 」

「 そうね~。炭鉱堀 ・・・ ハンター ・・・ 殺し屋 ・・・
(ちょっと待て! ! 殺し屋! ! ? それ仕事か! ! ?)
俺は口に出そうとしたが、言わなかつた。 」

「 そつだ! 才能の問題もあるけど、クローム は? 」

「 ぐるーむ? なんだそれ? 」

「 簡単に言つと請負人かな? 当事者ができないじ? 」とを変わりにや
つて報酬をもらひ仕事 」

そのときの俺は、この仕事が危険という事に気づいていなかつた。

「 なんでそれだけなのに才能がいるんだ? 」

「 この仕事つて結構ハイリスクなんだよね・・・。竜討伐やらなに
やらがあるし 」

(この世界には竜がいるのか・・・興味深いかも)

「 ん~・・・じゃ、やつてみるかな 」

俺は、心のうちではやる気満々なのだが、そこを抑えて冷静に話す。

「 よし! キマリ! じゃ、登録だね。クロームハウスに行くよ 」

俺はプロエルに従つて外に出た。

「 ヘヘ・・・ 」

俺は外の景色に驚いた。俺がいた世界 日本 とほとんど変わらな
い普通の世界だつたからだ。

「 まうまう、こつちこつち! 」

「普エルが俺の手を引つ張る。少し行つた先には、大きな屋敷みたいな建物があつた。

「「」がクロームハウス。どう?」

「どう? つてデカイな・・・」

この大きさは、俺の世界でいう、大富豪の屋敷みたいな大きさだった。

そう思つてゐるうちに普エルが一人で中に入つていた。

「新しいクロームを登録したいんですけど~」

普エルは受付の男に言う。よく見ると、男は生きていなかつた。死人のような体・人形のような目。俺はその男を見て、寒気がした。

その男は俺に、

「名前は?」

と聞いてきた。

「あつ。蓮崩です」

「レン・ホウ様ですね。承りました。所有武器は?」

感情が無い機械のようなしゃべり方で男は聞いてくる。

「所有武器?」

俺はなんのことかわからなかつた。

(合剣つて言いなさい。後で使い方教えるから)

普エルが耳元で囁く。

「所有武器は?」

男は聞いてきた。

「合剣です」

「承りました。登録が完了するまでお時間を頂きます。少しお待ちください」

「ふう~。終わつたわ。後は、少し合剣の訓練をして、それからあたしとあんたともう1人で仕事に行きましょう」

普エルが緊張している俺に言う。

「ああ。わかつた。頼むよ」

俺は登録が終わるまで何をしようか考えていたらふと、聖 しょ
の顔が頭に浮かんだ。
(聖・・・元気かな?)

第4話・異世界の人（前書き）

今回は蓮崩の幼馴染、聖の立場の話です。

第4話・異世界の人

教室が明るくなつた。

「あ、明るくなつた。蓮崩ダイジヨブ？」

あたしは蓮崩を真っ先に気にした。何でだろ？

「・・・蓮崩？」

あたしはビックリした！蓮崩がいなかつた！

「ねえ！だれか蓮崩を見た人いない？」

あたしは教室の中にある人全員に聞こえるように大声で言った。

「レンホウ？だれだ、それ？そんな奴クラスにいないぜ？」

「え！？だつて、さつきまでクラスにいたじゃない？」

「ていうか、そんな名前の奴なんかこの学校にいないぜ？」

教室の男子が言う。

（どういうこと？みんなが蓮崩の事を忘れてる・・・）

あたしが考えている時に学校の放送が鳴つた。

【原因不明の停電が起きました。電気系統整備のため今日の学校は終了します】

「「やつたぜ・・・」」

生徒は皆喜んだ。

だけど、私だけは喜べなかつた。

（蓮崩どうなつたの？）

あたしは不安でいっぱいだつた。

とりあえずあたしは、学校が終わつたので病院に行くことにした。

あたしは生まれつき左足の骨が弱い。そのために家では松葉杖を使つてゐる。けれど、運動神経だけは、男子より高い。

「うん。いい感じね。あまり無理はしてないみたい」

病院の先生は安心そうに言つ。

「ありがとうございます・・・」

「どうしたの元気ないけど？」

「いえ幼馴染が急にいなくなっちゃって……」

あたしは泣きそうな顔をしていたらしい。

「それは、気の毒に……でも、そんなときだから明るくなりましょう！」

先生は励ましてくれた。

「ありがとうございます」

あたしは、お礼を言つて病院を出た。お金はお母さんが先に払ってくれている。

（明るくしろって言つてもな……）

あたしが悩みながら帰つていると、目の前に紳士風の老人がいた。

「お嬢さんは レンホウ という名前を知つていてるかな？」

「蓮崩！？知つてるわ！」

あたしはビックリした。

誰も覚えていないはずの蓮崩のことを覚えている人がいたから。

「そうですか。ならば……」

老人は近づいてきて、持つている杖をあたしのお腹に突きつけた。

「むん！……」

老人がそういつた瞬間あたしは吹き飛んだ！

「なつ！」

あたしは吹き飛ばされながら、右足を地面に付けブレーキをかけた。

「ほう、なかなか強い娘さんだ」

老人はいつのまにかあたしの背後にいた。

「いざれまた会うでしようそれまで。私は 異世界の人間 さ

（異世界！？そんな世界ホントにあるの？）

あたしは困惑した。

「言い忘れていましたが、私の名前はキヨウリム。キヨウリム・ネルスです。では、また会いましょう。お嬢さん

キヨウリムという老人は空間を裂いて消えた……

（蓮崩。何処にいるか判らないけど、無事でいて！
あたしは蓮崩の無事を祈りながら家に帰った。）

「レン・ホウ様登録が終了しましたので、こちらでお越し下さい」

「ほら！レンホウ。早く！起きて！」

俺はいつのまにか寝ていた。

「んあ？なんだよ？」

俺は寝ぼけながら言う。

「いいかげんに起きなさい…………殺すわよ？」

（う・・・このプレッシャー！聖そつくりだ！）

俺はプエルと聖の性格が少し似ていると思った。

「わかった。すぐ行く」

俺は眠たい目をこすりながら受付に行く。

「どうぞ。これがあなたのクローム用の携帯電話です」

受付の男は番号（8403）付きの携帯を渡してきた。

「なんだ？この番号？」

「これはあなたのクロームナンバー。この電話に依頼が入ってくることもあるわ」

プエルが親切に説明してくれた。

「入ってくることがある？どういうことだ？」

「大体はここに来て依頼を確認していくの。」

（なるほど。納得）

俺がプエルと話していたら、受付の男が話を割って入ってきた。

「レン・ホウ様のクラスはFですので、手伝い任務しかできません」

「手伝い任務？」

俺は男ではなくプエルに聞いた。

「手伝い任務つてのは、子供のお守りとかのこと

「しょぼ・・・」

俺は落ちした。

「最初は誰でもそんなものよ」

エルが慰めてくれる。

「けど、あんたにはじクラスの任務を最初に見せるわ。付き添いならクラスは自由に選べるの」

「付き添いつて誰の？」

「あ・た・し」

ブルはにやりと笑つてこっちを見る。俺は寒気がした。

「ナニもケド一ムなのか？」

俺は、そうじゃない風かしいと思つて、聞いた。

あたしは〇クラスよ

- ^ ~ • • • █

俺は微妙な返事を返した

そういうって、プエルは外に出て行く。俺も後に従つた。

街中を歩いてると、プエルが携帯を取り出した。よく見ると、番号が書いてある。クローム用の携帯だろう。

「あ、 ガイル ? あたし、 ちよっと、 トルガ草原に来て?」
ブルは ガイル という奴に電話をかけていた。

（トルナ草原つて、俺が倒れてた草原だよな・・・）

「 そ う い や 、 あ ん た レ ヴ エ ル 人 じ ゃ な い の よ ね ？ じ ゃ 、 何 が 思 い 出 し て は 二 二 ル が 話 し 掛 け て き た 」

も・・・しらないんだよね?」

俺はうなずいた。

け草原に来ていた。

(ここがトルナ草原・・・)

「もうわざわざガイルがくるはずだから、それまで・・・」

エルが独り言を言つてゐる。

「…そうだ！！ 魔導式 を書いておきましょ！」

（またわけがわからんねえ単語が・・・）

そう思つていたら、プエルが俺のもとに近づいてくる。

「レンホウ、腕出して」

「腕？ ああ。ほら」

俺は片方の袖をまぐり腕を出す。

「ちよ～っと痛いけど、我慢しなさいよ？ 男なんだから

「…は？ それどういうこと？」

俺が聞いているのにプエルは無視している。

「今この者に新たな力を、偉大なる第8賢者クリスの名において誓う

プエルは静かな声で言つ。

（クリス？ お前はプエルだろ？）

そう考えていたそのとき！

プエルの指が血のよう赤くなつていつた。

「！」のままにしててね。腕

プエルがそういうと、俺の腕に赤くなつた指で文字なのか記号なのがわからぬものを書いた。

「！ ！ ！」

俺の腕に激痛が走つた！ 俺は激痛すぎて声も出なかつた。

「ふう・・・これでおしまい」

プエルが俺の腕に書くのを止めたとたん腕の痛みが消え、焼けるような熱さになつた。

「剣の訓練が終わつたら魔導も教えてあげるわ

気楽そうに言つが、そのときの俺は焼けるよつた腕の痛みが残つていて返事が出来なかつた。

そんなことも知らないでプエルは笑つて

「ほら、しつかり！ ！」

と言つ。

（こてえよ・・・・・こんなのでホントに魔導とやらが使えるのか

！？）

俺が思つていた時に、1人の少年（子供）が近くにきた。

「あ、ガイル待つてたよ」

俺は腕の熱さが消えてその少年を見た。そして

「こいつがガイル？」

俺は軽く馬鹿にしたように言った。するとペエルが

「そうよ。この子がガイル。レンホウの剣の師匠よ

「はあ！！？」

第6話・剣と魔導

俺はガイルからもらつた剣（合剣）を十字にあわせ俺の国、日本の昔の剣。 カタナ を想像した。

すると、合剣が光り一本の剣、刀になつた。

「いくぞ！ ガキ」

俺はガイルに向かつて突進する！

ガイルはそれを軽々とよけ剣の腹の部分で横薙ぎをしてきた。

俺はよけきれず派手に吹っ飛ぶ！

「まだまだじやのう。 お主！」

「今の声、ガイルお前か？」

俺は吹っ飛ばされた体を起こしガイルに聞く。

「わし以外に誰がある？ 正真正銘わしの声じやよ

「ジジくさ・・・」

俺がそういった瞬間！ ガイルが突っ込んできた！

ガイルはまた横薙ぎをしてきたが、俺はなんとか横薙ぎを刀で防ぎはじき返す。

「ほう・・・わしの剣を止めるとは・・・」

ガイルは驚いた表情で言つ。

「はつ！ だてに剣道やつてねえ！」

俺は調子に乗つた。 そのとき！ ガイルの剣が光り、大剣になつた！

「これは、防げるかのぉ？」

ガイルは大剣を引きずることなく、しかも片手で持つて突っ込んでくる！

俺は反撃できる隙が無く、ただ避けるしかなかつた。

「避けずに戦いなよ！ これは剣の訓練なんだよ！ ？」

プエルが大声で俺に怒鳴る！

（こんな剣受けきれるかよ！ 刀が折れるぜ！ ？）

俺はそう思いつつガイルに突っ込む！

「くらえ！」

俺はそう言って刀の刃の逆部分で切りかかる。

ガイルはすべての攻撃を避ける。

(こいつ、本当に10歳のガキか?)

俺がそう思っている時に、ガイルが

「死閃煉獄衝！」

と言つて大剣を振り上げ、下ろした瞬間！俺の体が切り刻まれた！

「な・・・！」

俺はそう言い倒れた。

「ダイジヨブ？レンホウ」

プエルが心配そうに俺を気遣う。俺は2時間気絶していたらしい。

「あれをくらつて生きてるとは、お主なかなかじやの！」

(殺す気か！？・・・このガキ！泣かす！！)

そう思つている中、プエルが

「ブルー・レスト！！」

と言つたら、俺の傷が少しづつ癒されていった。

「これが魔導か？」

俺は、痛みに耐えながら聞く。

「そ これは 癒し だから初級魔導だね」

「初級？じゃ、上級とかもあるのか？」

俺がそう聞くと、

「うん。あるよ。初級・中級・上級・特殊級があるよ」

「特殊級？なんだそれ？」

「特殊級は言靈じやなくて呪文なんだ。ちょっと長い・・・」

「へえ・・・じゃあ 言靈 ってなに？」

俺がプエルに質問していると、ガイルが

「お主は本当にレヴエル人ではないのだな」

と珍しそうに言つ。

「む！いいだろ？俺だつて来たくて来たわけじやねえ」

するとプエルが

「まあまあ、話を続けるよ。言靈は魔導士の呪文かな？」

「わかんねえ・・・」

俺がそう言つと

「バカな男じや」

いちいちガイルが絡んでくる。少しムカツク・・・

「ガイルはがまつて欲しいんだよ。許してやつて とりあえず、次は魔導の練習だね」

「おう！」

「と言つてもまづは、レンホウの言靈を決めないと・・・。何がいい？」

「何がいいって言われてもなにを基準に考えるんだー？」

俺がプエルに怒る。

「そつか。『メン』『メン』 えつと、例えば色なんかだとわかりやすいね。あたしの言靈は ブルー・レスト。これは青つて意味の言葉が入つてゐるでしょ？」

「うん」

「つまり、青は水とかを表すからあたしは水系の魔導が得意なわけ。わかつた?つまり色を入れればその色を連想する属性が強くなるんだ」

「なるほど、つまり 色 と 属性 か」

プエルの長い説明が終わった。そして俺は言靈を考えていた。

「ん・・・俺のいた世界の古代文字で 無 つて意味の言葉で トリス は?」

「無のトリスか。うん いいね」

プエルはやけに上機嫌で言つ。

「じゃ、言靈を決めるからあたしの後に続いて言つて

プエルがそう言つと彼女の周りの空気が変わった。

「我が言靈を決める。その名は トリス 無を意味する言葉」

俺は続く。

「我が言霊を決める。その名は トリス 無を意味する言葉」とすると、右手の甲に文字が浮かんだ。

「これはこの世界の古代文字 スローク 文字らしいよ」

「へえ・・・」

俺は納得したように返事をする。

「魔導を覚えたのならその剣は主にやろ?」「

ガイルがしゃべる。

（どういうことだ？魔導を習得したからって）

俺は不思議で仕方なかつた。

「そうか。 消失 と 召喚 ね さすがガイル」

プエルが気づいたようにガイルを指差して言う。

「最初に 消失 と 召喚 を覚えましょ」

「どうやって覚えるんだよ？」

俺はプエルに聞く。

「簡単 カンタン あたしに続いて」

（またか・・・）

「能力変換！ 消失 トリス」

「能力変換！ 消失 トリス」

と俺は続く。すると、俺が持っていた刀が消えた。

「じゃ、もう一回！ 今度は 召喚 だよ」

「はいよ」

俺はやる気なさそうに返事をする。

「能力変換！ 召喚 トリス」

「能力変換！ 召喚 トリス」

そうすると、目の前に消えた刀が合剣の状態で現れた。

「ひとまず、これだけでいいかな？ 後々別な魔導は教えていくよ」

プエルがそう言つたらガイルが

「そうじゃな。早く任務行こうぞ！」

そう言ってガイルだけ先に町に戻つた。

「じゃ、あたし達も行こう レンホウ」

そうペエルが言つと俺の手を引っ張つて町に戻る。

俺とプエルは町に着いたら、すぐにクロームハウスに向かった。

「遅いぞ！一人！！もつと早く来れんのか！」

クロームハウスに着いてすぐガイルから怒りの言葉をもらつ。

「仕方ないでしょ？どつかの小さい少年が大剣でレンホウの体を切り刻んじゃつたんだから。ねえ？」

プエルが意地悪そうにガイルに言つ。

するとガイルは

「仕方あるまい。つい本気になつてしまつたのじゃから
軽く開き直つたようにも聞こえたが俺は気にせず

「そんなことより、仕事やらないのか？お一人さん

「あ、忘れてた。こんな子供に向きになるなんて

「わしは子供ではない！」

（いいから、早く受付に行け！）

俺はそう言つたが、最低クラスの俺が言つても意味が無いと思つて言わなかつた。

喧嘩が終わりプエルが諦めたように受付に行く。

「なんか仕事ありますかあ～？」

（ほれみる。そつちが子供ではないか・・・）

ガイルが囁く。

「番号と名前。後、受けるクラスを言つてください」

「クローム番号1538。プエルです。それと、仕事のランクはC
で」

子供のような喋り方だが、あえて言わなかつた。プエルはキレると怖い！それはこの間わかつたことだ。

「承りました。それでは仕事を探すので少々お待ちください
受付の男はプエルを見て言つ。

「そういうや、仕事を受ける時は受ける人数とかは言わないのか？」

「そういうことはクライアント。つまり依頼主に直接会つてから言うんじゃよ」

珍しくガイルが説明してくれた。

「仕事が見つかりました。金塊の採掘・希少動物捕獲・

「コレグ山の伐採禁止運動」がありますが、どれにするのですか？」

「採掘に捕獲に禁止運動・・・。ずいぶんバラけたわね」

「うむ。どれをやろうにもFクラスがいるとすべてが大変じゃ」

ガイルがまた皮肉を言つてくる。

俺は（我慢しろ俺・・・。たががガキの言つてることだ・・・！）

と、自己暗示をかける。

「カンタンな所で捕獲にする？」

「そうじやの。捕獲ならこやつも手伝えるじやう？」

「お決まりになられましたか？」

「はい。希少動物捕獲の依頼をやらせていただきます」

プエルが力強く言つ。

「承りました。では、町の東端にある。屋敷に行つて下さい。クライアントの家はそこですので」

「わかりました。じゃ、行こレンホウ。ガイル

プエルがそう言うと、俺とガイルは

「ああ。わかった。すぐ行く」

と言い、クロームハウスを出てクライアントの家に向かつた。

「おわ～。でつけなあ！」

俺はクロームハウスより大きい屋敷を見て驚いていた。

「そりや、ここはレーヴェルシティ1大きい屋敷だもん」

プエルが自慢氣そうに言つが

「ここはそなたの家ではないじやうプエル」

とガイルがつっこむ。

「しかし変じや。何ゆえ希少動物捕獲のクライアントがこの屋敷の

主人なのじゃ？」

「いや、まだ主人つて決まつたわけじゃないでしょ・・・」

今度はペエルがつっこむ。

大きな門が開きガードマンが一人こっちに来た。

「この屋敷に何の用だ？用が無いなら立ち去れ！」

ガードマンは傲慢な態度で聞いてくる。

「あたしたちは クローマー です。クライアントに会いたいのですか？」

「そうじゃ。早く通せ！団体だけがでかい馬鹿者どもめ！」

と、ペエルとガイルが強気で言つ。

するとガードマンは

「し、失礼しました。まさかクローマーの方々だったとはーすぐお通ししますー！」

（なんでクローマー？・・・あ、クロームをする人だからクローマーか。納得）

おれは1人で納得していると、

「早く来なよ。レンホウー」

ペエル達はガードマンに連れられて奥に進んでいた。

「はいよ。すぐ行く」

屋敷の中の一室で待つていると、1人の女の人が出てきた。

「わたくしがクライアントざます。オーツホツホツホツホー！」

（うわ・・・ざますって使う人いんのかよ？キモイな）

俺は口には出さず頭で思つていた。

「早速仕事の話に移りたいのですが」

ペエルがそう言つと

「そうですね。あなたに捕獲してもらいたい希少動物は アポス

ざます」

「アポス？それはいつたいどういう動物なのですか？えーと・・・」

俺は名前を言つたが聞いていないからわからなかつた。

「申し送れたざます。わたくし、チフレと申つります」

「ではチフレ婦人。アポスとは？」

俺は質問をした。

「アポスとは、とても臆病な動物ざます。外見的特長は体色が黒、手足が赤、顔は白と、とても変わった色をした動物ざます。主な生息地域は草原や湿地帯に多く生息していだざます。もう今となつてはハスク草原にある隠れ家にいるだけになつてしまつたざますけど」「なるほど。それで我らに依頼を頼んだといふことじやな「婦人」ガイルが納得したような口ぶりで言つ。

「そつざます。ですから、わたくしはその動物を集め繁殖させまた増やそつと考へてゐるざます！」

（なるほど・・・。正当な理由があるわけか）

俺が考へてゐる時に

「わかりました。この仕事。請負ましょ。私とレンホウ。そして

ガイルが」

プエルが立ち上がつて言つ。

「おお・・・・・！－－ありがたござます。では、頼むざます！」

「「「お任せを」」」

三人でそつ言つと屋敷を出て草原へ向かつ。

だいぶ歩いて、俺たちは、ハスク草原に来ていた。

「さて、見つけるまでが一苦労じやな」

「そんな時のために練習していいた魔導があるよ」

（そつか、魔導を使えば案外楽に・・・）

俺がそつ思つてゐる時に

「・・・・ブルー・レスト！－！」

プエルが言靈を発した瞬間！俺とガイル。そしてプエル。さりに上空を飛んでる鳥までもが光りだした。

「なんの力じや？」

「光 よ。力を生き物だけに留めたの。だから、アポスもすぐこ見つかる・・・。ああー！－！」

力の説明中なのにプエルが叫んだ。

「見て！！あれがアポスじゃないかしら？黒と赤と白！間違いないわ」

「そのようじやな。レンホウ！捕まえにいくぞ！！プエルは 身体強化 を！」

そうガイルが言って、俺とガイルは目標向かつて走り出した。

「オッケー 任せて！」

能力変換 脚力強化 ブルー・レスト！！

プエルが後ろで言霊を発すると体が軽くなり普通の2倍速く走れるようになつた。

「さすがプエルじゃ。いくぞレンホウ後ろから回り込め！」

ガイルの言葉に従つて俺は後ろに回りこみ、アポスを捕らえることに成功した。

「こいつがアポスか？ 犬と狐が合わさつたみたいだな」

俺はアポスを見ながらいた。そして、捕まえてから数秒後。体が重くなつた！

「まあ、もう必要ないでしょ？身体強化」

プエルが術を解いていた。

「まあ、こにしては簡単じやつたな」

ガイルがそう言つと、空が突然暗くなつた！

「なんだ？」

俺は空を見上げて呆然とした。推定75mの竜が降りてきたのだ！！

第7話・初仕事（後書き）

この小説を読んでの感想お待ちしております

ガイルは剣を片手に、俺は両手に携え竜に突進する！

竜は難き払うように尻尾で俺とガイルを吹っ飛ばした！！

「おい！ プエルはなんで補助してくれねえんだ！？」

「プエルはアポスに 捕縛 を使つてから補助が出来ないんじゃ！！ ここはわしらだけで食い止めるのじゃ！」

「ごめん！！ なんとか二人だけでそいつを倒して！！」

プエルがアポスに魔導をかけながら言う。

「・・・わかつたよ！！ つつても、相手は竜だぞ？」

俺は吹っ飛ばされた体を起こしてガイルに言う。

「竜とて所詮は生き物。ダメージを与えづければ倒れる！」

そう言い、ガイルは剣を大剣に変化させ竜の体を切る！

ガキン！

ガイルの剣が竜の鱗にはじき返された。

「おい！ 全然効いてねえぞ？」

「やかましい！！！ おぬしも手伝え！！」

ガイルが俺にキレる。

竜は空気を吸い込み口から巨大な火球を吐き出す。俺はそれを何とか避け竜の懷に潜り込んだ！

「能力変換 水」

俺は魔導を水に変え、合剣を十字にあわせ双剣に変化させた。そして、双剣に水を纏わせ切りかかる。

「大剣が効かねえんなら集中した場所に傷をつける！！」

俺は竜の腹を何度も切り、深手を負わせようとした。

しかし、竜は後ろへ下がり俺に火球を放つてきた！

俺はよけられずに直撃した。

「レンホウ！！！」

プエルとガイルの声が聞こえる。

(うわ、熱すぎだろ・・・。俺死んだかな?)
俺の意識はなくなつた・・・

「ブルー・レスト!!--お願いだから目を覚まして---」
「エルが泣きながら俺に魔導をかける。

「死ぬつて誰がだよ・・・?」

俺はゆつくり体を起こした。

「レンホウ!よかつた死んだかと思つちやつた・・・」
(勝手に殺さないでくれ・・・)

「まさかおぬしの中にアレがいたとは・・・」

ガイルは驚きながら俺を見て言つ。

「アレ?」

俺は二人を交互に見て言つ。

「精霊 よ。それも 人 を司る」

「精霊?」の世界には精霊がいるのか?」

「いる・・・といふか憑くじやな。この国の人間は生まれた時に精
霊が憑くのじや。わしは 地 」

「あたしは 水 よ」

「へえ・・・!!--」

俺は返事をしながらエル達の奥を見た。

竜が切り刻まれて死んでいた!!--

「その竜・・・」

俺は竜を指差しながら言つた。

「おぬしの中にいる精霊が出てきたりやつを殺したのじや。なんと
もむじい方法での」

「あなたの中にいる奴が消えるとき」

「しばらくはこの中にいてやる。宿主に伝えてくれ
つて言つてたよ」

「宿主つてのは俺か・・・。むじい方法つてのは?」

俺はガイルから俺の中にいる奴の事を聞いた。

俺が火球をくらった瞬間、俺の髪がオレンジ色になつたらしい。言
い忘れていたが、俺の髪の色は黒。少し赤の入つた黒だ。

そして

「やつとでられたぜ！外は広くていいねえ！！たく、早く俺の存在
に気づけよ？クソ宿主！！」

そいつはそう言って竜のほうを見た。

「ほう、竜か・・・。丁度いい俺の運動に付き合つてくれよ」

男は双剣を持つて大胆に竜との間合いを詰めていく。

グルルル！！！ガア――――――――！

竜が咆哮をあげると、男は

「そう焦るなよ。焦ると死ぬのが早くなる・・・ぜ――――！」

男は一瞬で竜を通り抜けた。・・・次の瞬間

竜の体から血が噴出した！！

「ヒヤハハハ！！まだまだだぜ？俺を楽しませてくれよ？」

男はそう言つと何回も竜を往復し切り刻んでいった。双剣は血の色
が移り赤くなつていた。

「もうそろそろ死にしてえだろ？遠慮すんな。しつかり殺してやるよ
――――！」

男はそう言つと

「我に託されしは大いなる闇の慈悲。漆黒の処刑人よその大鎌で罪
人の首を切り落とせ・・・」

（これは、特殊魔導！！！）

プエルはガイルに

（危険だわ！！早く後ろへ下がつて）
と伝えたらしい。

ガイルはすぐに後ろ下がつた。そして男は

「さあ、お前は生か死かどっちがいい？まあ、お前に選択権は無い。
ヒヤハハハ！！！死ね」

そう言い、竜は闇に飲まれた。

数分がたつて闇が晴れそこから竜が出てきたが、切り刻まれた後だつた・・・

そして男はプエルに伝言を言い意識を消したらしい。そして髪の色も戻つたらしい。

「そんな奴が俺の中に？」

俺は生まれて初めて自分を怖いと思つた。

「まあ、助かつたからいいでしょ？…が、後はこのアポスを届けて依頼終了ね」

「そうじやの、それから、竜の鱗と角を持つていいつかの」

「なんでだ？」

俺はガイルに聞く。

「竜は依頼に関係なく討伐すればお金がもらえるんじや」

「なるほどね」

「じゃ、婦人宅に行こう」

二人が先に町に戻つたが、俺は竜を見て不安と恐怖にかられた。

そして、俺たちは町に戻つた・・・

俺たちはチフレ婦人の屋敷に行き、アポスを届けその際に竜と戦つたことを話した。

「なぜ、アポスを捕らえたなら竜が現れたのかご存知ですか？チフレ婦人」

俺は極力丁寧な言葉で話した。すると
「さあ・・・。アポスは臆病な動物ざますから、竜に助けを呼んだのかも知れないとさますね」

まったく理由になつていない返事が返つてきました。

（このババア・・・！ちゃんとした答えを言え）

俺は本音を飲み込み口には出さなかつた。

「ですが、アポスを捕らえて本当にありがとうございます！わたくしのささやかな夢は叶つたざます」

「ささやかな夢？それは一体どういづいとですか？」

プエルが怒りの声を殺し冷静な声で問う。

「そ・それは、ほら、わたくしの夢は希少動物を保護することです
ので・・・」

チフレ婦人は苦し紛れの言い訳をする。

「そうですか。わかりました。では依頼は完了しましたので、私たちは帰ります」

「そうざますね。お金はクロームハウスで貰つてほしげざます」

チフレは満足そうに言つ。

そして俺たちは婦人の屋敷を出て、クロームハウスへ向かつた。

俺たちはクロームハウスへ行き受付の男の所に行つた。

「依頼を終えたようですね。ご苦労様です。では、これが依頼完了
金です」

そう言つと男はプエルにお金を渡した。

「へえ・・・。Jクラスで10000ギルドかあ。あいね
「さるどー。」

「Jの世界の通貨じやな

「ガイルが説明してくれた。

（このじゆよくガイルが説明してくれるな・・・）

俺はそう思いながら一人と一緒にクロームハウスを出た。

「とりあえず、家に帰ろつ。レンホウも家族みたいなもんだからね

」

（家族か・・・）

俺には家族はいなかつた。と言つよりいたが全員病氣や事故などで死んでしまつていてから。

「どうしたのじや？」

ガイルが心配そうに俺を見て言つ。

「いや、俺家族いなかつたからさ」

「え！？」じや、両親はいなかつたの？」

「いや、いた。全員死んだけど」

俺は不思議と悲しくなかつた。

そう言つてると、家に着いていた。

この家は、純和風の雰囲氣を出していた。

「広いな・・・」

「まあね」

プエルが自慢気に言つ。

俺たちは中に入つて談話室？茶の間？みたいな所に來た。

「とりあえずレンホウは寝たら？別な世界から來て疲れたでしょ？」

「どんなどよ？」

「気にせず」に寝ることじや。疲れを癒せ

俺はガイルとプエルの言葉に甘え寝ることにした。

「じゃ、明日ね」

「と言つても明日は請負はしないつもつじや。ゆつくり寝るが良い

」

「ああ。じゃ、おやすみ」

俺は布団を用意して寝た。

「うー、どこだ？ ああ。夢の中か

夢と言つても質素すぎるほどだ。

光が少しきかない空間。だが、しつかりと道はわかる。

「なんかいる？」

俺は道の奥に人影を見つけた。

よく見るとそれは俺の姿だった！！

「よつ、宿主さん 元気だつたか？」

「お前が俺の中にいる精霊か？」

俺は表情を変えずに聞き返す。

「その通り やつと通じたなあ。早く氣づいてくれよー。」

精霊は傲慢な態度で言つてくる。

「ここに来たついでだ。お前に俺を呼び出す呪文を教えてやるよ

「そんなの聞きたくないね」

俺は耳をふさぐ。

しかし

耳をふさいでもその声は聞こえてきた。

「我に託されしは大いなる殺戮の使者。我的体を汝に捧げる。汝の力存分に發揮せよ。だ」

「なんで耳をふさいでも聞こえんだよ！」
「あほか？ てめえ。ここは俺とお前の精神が繋がった世界だぜ？ 聞こえないなんてあるわけないぜ？」

精霊は傲慢な態度を崩さず俺に話し掛けてくる。

「そういうおまえの名前はなんだよ？ 精霊」

「お前の言霊だぜ？ 俺は トリス だ

じゃあな。宿主 「

そつ言つと、精霊 トリス は消えた。そして俺もその世界から消えた。

俺が起きたのは次の日の朝だった。

「くそ・・・。胸くそ悪い！！」

俺は軽く不機嫌になりながら朝を迎えた。

第10話・クラス昇格（前編）

俺がここ レーヴェル国 に来てから、1ヶ月がたつた。

「今日はどんな依頼が良い？レンホウ」

「どんなつて、俺さクローマーになつて1ヶ月なのにいまだにFクラスなんだけど・・・」

そう。俺は自分の仕事ではなく毎回ペルやガイルの依頼の付き添いだけをやっていて、まだ1回もFクラスの依頼を受けたことが無い。

「ならば、クラス昇格をするか？今のお主ならばじぐらいにいけるが」

ガイルが言う。

「そうだね。今のレンホウならCクラスぐらいにはなれるよ」

「昇格つてどうやってなんだ？」

俺は一人に聞く。するとペルは

「クロームハウスに行って受付の人にクラス昇格したいって言えばオッケーだよ」

と簡単に説明してくれた。

「しかし、どんな内容かわからぬから アーバス に聞いておくのが良いじやろ」

「アーバス ？」

俺はガイルに聞いた。

「うむ。情報屋じや。ほほ確実な情報を売ってくれるぞ。わしらも信用している」

「へえ・・・。じゃ、行つてみよっぜ」

俺は一人に道案内を頼んで家を出た。

家を出て10分ほど歩いた所にポツンと一軒家があつた。

「ここが情報屋 アーバスの館 だよ」

プエルが家を指差しながら言つが、とても館には見えずただの小ぢんまりした家だ。

「じゃ、早速行こうぜ？」

俺は家に入ろうとしたが一人はその場に立ち、動かない。

「どうした？ 行かないのか？」

「館には独りではいるのがルールなの。」

「うむ。我らはここで待つてゐるぞ」

そう言つて二人は手を振つた。

（そんなルールあんのか・・・）

俺はそう思いながら館？に入つた。

中は（中も）案外普通の家のつくりで物珍しいものもなかつた。俺が独りで待つていると奥から1人の老婆が歩いてきた。

「この私に何のようかね？ 異世界のお方。今はあの一人と暮らしているんじゃろう？」

「つ・・・！ ！ ！ ！ なんでわかるんだ？」

「私は情報屋ですよ？ それくらいの事など・・・さて何が知りたいのじゃ？」

不思議な気配がある老婆 アーバス に俺は知りたいことを話した。

「ほおほお。E・D・Cの昇格テストの内容が知りたいとな・・・いいでしょ。教えましょ。まずEに上がるテストの内容はすなわち、戦闘能力の高さです。つまりは、戦闘ですね

（まんまじやねえか・・・）

俺は本音を言いたかつたが言わなかつた。

「次にDに上がるために必要なのは瞬発力です。これも戦闘ですね・

・・

俺は軽く腹が立つてきた・・・

「最後にCに上がるためには魔導の強さ、精神力の高さです。実質この昇格が一番厄介と言つ声が多数ありますね。ま、このくらいでしようか？」

俺は参考になつたのか、ならないのかよくわからなかつた。

しかし、情報をくれたことには感謝したように見せるため軽く会釈をして店を出た。ここは初回のみ無料らしい。（クローマー限定）

外に出るとプエルが

「どうだつた？ 有力な情報は教えてもらつた？」

と聞いてくる。

「ああ・・・・・。まあな・・・・・」

俺は適当に返事をする。

「ではクロームハウスに行き昇格テストを受けに行け」

ガイルが小さな手で俺の背中を押した。

「そうだな。一応情報は貰つたんだし」

俺たちはクロームハウスへ向かつた。

俺たちはハウスへ着き中に入つて、受付の男に

「昇格テストを受けたいんですけど・・・」

と言つた。

「クローム番号。名前。クラスを言つてください」

男は相変わらず感情が無い。

プエルから聞いた話では魔導で動いているらしい。

「クローム番号・・・・・。あれ？ 俺何番だつたっけ？」

俺は自分のクローム番号を忘れていた。

ガイルは頭に手をやり、プエルは

「バカ？」

と言わんばかりの顔をしていた。

「あなたがお持ちになつてているクローム用の携帯電話をお見せください

さい

受付の男は俺に携帯を出すように言つてきた。

「あ、そうか携帯に書いてあつたつけ。

え」と・・・8403番です。名前はレンホウ。クラスはFです。

「承りました。では準備をするので少々お待ちください。

」

準備が完了したら呼びますので、あちらの扉に入つてください」

男はそう言つと扉の奥に行つた。

俺はガイルとプエルに怒られながら待つていた・・・

「まったくクローム番号忘れるクローマーなんか聞いたこと無いよ？」

「そりじゃ！お主はバカだと思っていたが、まさかこれほどとは・・・

（そんなに怒られるようなことしたか？俺）

俺は説教に耐えながら準備完了の知らせを待つている。そのとき「レン・ホウ様。準備が完了しましたので、その扉から中にお入りください」

（やつと、呼び出しだよ。ようやく開放される・・・）

俺は急ぎ足で扉に向かつた。すると後ろから

「早く終わらせてきなさいね！あなたなら楽勝のはずよ～」
プエルの声援が聞こえてきた。そして、ついでに聞こえてきたものはガイルの声で

「帰つてきたらまたみつちり説教をするから覚悟する」とじやな～」

俺は、（うわ～・・・ゆっくり帰つてこよう）

俺は心の底からそう思い、扉を開け奥に入つていった。

第1-1話・クラス昇格（中編）

扉の奥に行くと、短い通路があった。

俺は歩きながら周りを警戒して進む。すると、受付の男が通路の脇に立っていた。

「先に所有武器を出しておくことです。」の奥では魔導は使えませんので」

俺は男の指示に従つた。

「能力変換 召喚 トリス・・・」

すると男は

「では、これを片腕にはめてください」と言い、俺に腕輪を差し出した。

「腕輪？・・・わかった」

「腕輪をはめましたら奥に行き、指示に従つてくださいでは、健闘をお祈りしています」

男はその後は何も言わずにそこに立つていた。

通路の奥は何も無い正方形の部屋があった。するとどこから

「さあ、テストを始めます。このテストは戦闘能力を見るテストです。

あいてはあなたを殺す氣で襲つてくるでしょ。

それを交わしつつ相手に決定打、または死に至らしめるほどのダメージを与えて下さい。

では始めます・・・」

放送が終わり奥の壁が開いた。出てきたのは、人間とは思えないほど巨大（推定5m）の男が槍を持ってやつてきた。

「グウウ！－！ゴロシデやる」

（こいつは人間じゃないのか？なら話は早い殺す！－！－！）

俺は剣を十字に構え、曲刀に変化させた。

化け物は俺と直線状に並びそのまま槍を持って走ってきた。

俺はそれを軽く避け横腹に水平に切りかかった。

だが、化け物の体に当たる前に剣が止まつた。

（切れない？いや、俺は本気で切りかかつた！なのになぜ剣が途中で止まる！？）

俺が考へてる時に化け物は遠慮なしに俺を蹴り飛ばした。

「ゲホッ！痛つてえ・・・」

俺は壁に叩きつけられ口から鮮血を吐き出す。化け物は攻撃を繋げるように戦で俺をついてくる。

俺は体を捻つて槍を避け、着地する。が、完全には避けきれず横腹から血が流れる。

（血なんて流したの2年ぶりくらいだな）

俺はそう考へながら、化け物の懷に飛び込み腹に切りかかる。

だがまたしても剣は途中で止まる。

「何で切れねえんだよ！？」

俺が叫んでいると小さな声で

（助けてくれ・・・俺を殺してくれ・・・

もういやだこんな体は！誰か、俺を殺してくれ！）

そう聞こえた。

（まさか、こいつ人間！？嘘だろ！？

いや、だけど人間なら殺せない理由がわかる）

俺が考へている時に化け物は

「ジねエ！おマえオ殺ズ！」

（さつきの声と一緒にだ！間違いないな

俺がこいつを切れないのは本能的なものだ）

似たような例がある。

作られた物（生き物）は作り主を殺すことが出来ない。体は本気で殺そうとしても本能的に察知し行動にブレーキをかけてしまう

らしい。

（だが俺は作られててもいなし普通の人間だ）

（まだわかんねえのか？宿主さんよ？お前は人間を切ることに迷いがあんだよ！迷つてたらこいつに殺されちまうぜ？）

「トリス・・・。久しぶりだな。あの夢以来か？」

周りには独り言のように思つだらうが、俺は精霊 トリス が憑いている。

プエルに聞いた話だと精霊は話すことは出来ないらしい。だが俺の精霊は話す。しかも傲慢な態度で！！

俺は化け物の攻撃を避けながらトリスと会話をする。

（なあ・・・？俺に代われよ？こんなザコ5秒でミンチにしてやるぜ？）

「こいつは人間だぞ！？そんなこと・・・」

（元 人間だろあ？とつと殺して人間に生まれ変わらせたほうがいいと思うぜえ？）

「そういう問題・・・！？」「ホツ！」

会話に集中していたために化け物の攻撃に気が回らなかつた。俺は槍の横薙ぎをくらいために壁に叩きつけられた。

（おいおい・・・。死んじまうぜえ？ほら、俺に代われよ！！）

「お前に代わつたら俺が後悔するからな・・・」

（チツ！ああ そうかよ！？じやあ勝手に死ね！！！）

そう言ってトリスは意識を俺の奥底に消した。

（けど、どうする？俺はあいつを切れないし、魔導も使えない）

俺が対抗策を考えている途中にまた

（誰か・・・助けてくれ・・・）

俺を殺してくれ！！

（くそつ！？殺すわけにもいかねえし・・・

ん？たしか1・2週間前に）

「なあ、剣も魔導も通用しない敵がいたらどうするんだ？」

俺はガイルとペエルに聞いた。

「そういう時はほれ、ペエルが 身体強化 をかけて一人でタコ殴りじゃ！！！」

「そ あたしの力を強くしたら、配分を考えてガイルに送るのよ。それで相手をボコボコね」

「なんとも、原始的な方法だな・・・」

（そりがー！ 素手だ！ ・・・って氣づくの遅すぎだろー！ 俺）

俺は曲刀を戻し、合剣を壁に刺して化け物を向いた。

「これなら、ダイジヨブだ！！」

俺は拳を握り真っ向から化け物の槍に対峙した。

「何ヲヤツデイル！！」

化け物は槍を構え突進してくるが、俺は体制を低くし槍を避け地面と水平に足払いをして化け物を転倒させた。

そしてすかさず背中に乗り、全体重をかけて首に攻撃を当て氣絶させた。

化け物を氣絶させたらどこにあるのかわからないスピーカーから声が聞こえた。

「おめでとうございます。あなたはこれではれてEクラスです。もつと精進して上を目指してください」

声が消えると、化け物が出てきた反対側の壁が開き、結構渋い男オッサンが出てきた。

「おめでとうーーようやくEクラスになれたねー。」

「あんた、誰？」

俺は声に出すつもりは無かったのだが、出てしまった。

「おお、すまない。私はクロームハウスの全権を仕切るギルドステム・ファルクだ。以後お見知りおきを」

「はあ・・・蓮崩です」

「うんうん。聞いているよレン・ホウ君だね？」

「いえ、蓮崩です。蓮と崩の間に点は、いりません」

「そうかそうか、悪かつたねレン・ホウ君」

（このオヤジ！――）

そして、俺はいろいろと会話をしてクロームハウスの受付場に戻った。

「うわ――！血だらけ・・・大丈夫？」

プエルが心配そうに俺に駆け寄ってきた。

「大丈夫かな？一応は」

「そんなことはどうでもよい。プエル！癒しを」

「そうだね！変換 癒し ブルー・レスト」

プエルは言霊を発し俺の傷を癒し、血を増やした。

「癒しは血も増やせるのか？」

「うん といつても元々の血の量よりは増やせないけど・・・」

プエルは申し訳なさそうに俺を見て言つ。

「いや助かる。実際貧血でフラフラだったからや・・・」

俺たちが他愛も無い話をしていると

「レン・ホウ様続いでロクラスに上がるためのテストを受けますか？受けるのならばすぐにご用意しますが？」

「どうするかな？」

（たしか次は瞬発力だよな・・・大丈夫か？）

「受けます」

俺は軽い気持ちで返事をした。

「ダイジヨブなの？」

「まあ、大丈夫だろ？」

俺がプエルと話していると

「承りました。では少々お待ちください。準備が出来ましたら・・・

「もうよい。そのセリフは聞き飽きた！――」

なぜかガイルがキレた。

（聞き飽きたつて・・・。まだ一回しか言つてないだろ）

「・・・わかりました。では準備をしますので少々お待ちください」

そう言つて男はまた扉の奥へ行つた。

そして、俺は仮眠を取りながら待つことにした。

（フレルに起こされる前に起きよう）

そう思いながら・・・

第1-2話・クラス昇格（後編）（前書き）

キャラクター紹介が後書きにあります。

第1-2話・クラス昇格（後編）

「レン・ホウ様準備が完了しましたので奥の扉にお入りください」「俺はこの放送で目が覚めた。

「ん〜〜・・・。よく寝た？かな」

俺は軽く準備体操をして扉を開け奥に行つた。

奥に行くと通路の脇にまた男が立つていた。

「今回は武器は必要ないでしょ〜」

では、これを片腕に」

そう言うと男はまた俺に腕輪を差し出してきた。

「これって、俺さつきも付けただろ・・・俺はさつきのテスト前に付けた腕輪を男に見せようとしたが腕輪はどこにも無かつた。

「この腕輪はこのテスト中に限り存在できる腕輪なのです。
さあ、腕輪を」

（魔導か？）

俺は考えながら男から腕輪を貰い片腕にはめた。

そして、奥に行くとまた同じような正方形の部屋があつた。

（変わつてねえ・・・）

俺はいろいろと考えていた。そのとき

「Dクラスに上がるテストの内容は瞬発力です。

これからあなたには、あるものを捕獲していただきます」

「それは、この部屋の中でつて意味か？」

「ええ。そうです。そのものはあなたを殺すことはありませんが、行動不能にするほどは攻撃してくるでしょう。あなたはそれを交わしつつあいてを捕まえ、気絶させてください。

では、始めます・・・」

放送が終わると奥から、子供がてきた。

「ガキ？こいつを捕まえりやいいんだよな？」

「楽勝だぞ？」

俺はそう言いつ子供に近づくが、子供は風のよつたな速さで俺を通り抜けた。

そして俺の体を切つていた。

「痛つてえ・・・！一つか、速つ・・・」

俺はあまりの不意打ちに対処できなかつた。

「なるほど・・・。痛つつ・・・！」

俺は切られた左肩をおさえながら子供との間合いを空ける。すると、子供は構えをときただそこにたたずんでいる。

「ん？近づかないとダメなのか？」

俺は近づこうとしたが不思議な感覚が頭をよぎつた。

（ん？なんかトリスが出てきたよつた・・・。

（氣のせいか）

俺は振り払つよう顔を振り子供に近づく。

しかし、また子供は風のよつたな速さで俺を通り抜け今度は右肩を切つていく。

（ここつは近づけば通り抜けて切り、離れれば隙を見せるか・・・。

どうするもんかね？）

俺は子供との間合いを空けゆっくり考える。

「よし。これでいくか！」

俺は考えを頭の中でまとめ子供に近づいていく。

子供は通り抜けようとするがなぜか子供は動かない。

（やつぱりな。捕まえようとするがなぜか子供は動かない。

しかも攻撃もしてこないとはね・・・。）

俺はゆっくり子供に近づき子供の目の前に座つた。

「よ！なんでおまえみたいなガキがテストの係なんかやつてんだ？」

俺は子供にゆっくり聞く。だが子供は口を開こうとはしない。

（今ならダイジョブだろ？）

俺は子供の隙をついて片腕をつかみ首を攻撃して氣絶させた。

「よし。これで終わりだな」

俺はゆっくりと立ち上がり放送が鳴らないのを確認した後、壁が開きまたしても出てきたのがギルドステムだった。

「おめでとう。まさかこんなに早く一段階も上がるとはね~。恐れ入つたよ」

ギルドステム（ギルド）はあたかも自分が合格したように嬉しそうに俺に話し掛けてくる。

「どうも・・・。

俺、用があるので帰つていいですか？」

「そうか、じゃあこれをあげよう」

ギルドはそういうと俺に首飾りを渡してきた。

「これは？」

「これはチョーカーといってね身分を表すものさ。Dに上がればもらえる装飾品だよ。

上のクラスの任務は危険なものばかりだからね。身分証明が必要になつてくるんだ」

「どうも・・・。じゃ、俺帰ります」

俺は必要ないと思ったが一応貰つておくことにした。そして、俺は受付場に戻つた。

「お帰り～ どうだつた？」

「まあ、さつきよりは簡単だつたな」

プエルが聞いてきたが俺は

「余裕！！」

という表情で答えを返した。

「両肩から血が出ておるぞ？ それでも簡単だつたのか？」

ガイルはなぜかいやみ口調で俺に突つかかつてくる。

「この傷は浅いからな。そんなに苦労はしなかつたつて事だ」

俺がそういうとガイルは納得した表情で頷いた。

「レン・ホウ様Cクラスには上がりますか？」

受付の男はやけに簡単に聞いてきた。

「今日はいいです。疲れもあるので」

「そうですか。わかりました」

俺は頭では大丈夫だと思っていたが、体が言つことを見かなかつた。

「とりあえず、家に行く？」

「エルが俺に言つてくる。

「そうだな。休みたいしな」

俺は氣の抜けた声で返事をする。

「わかつた。じゃ、行こう 面倒だからとびよつ？」

「おう。・・・ん？ とぶ ？それどうこう・・・」

「能力変換 移動 ブルー・レスト！」

エルが言靈を発したらいつのまにか家の前にいた。

「久しぶりじやな。この移動方法は」

「そうだね。5・6ヶ月ぐらいしてなかつたもんね」

二人は普通どおりに話しているが俺は不思議で仕方なかつた。

「今つて魔導だろ？ 移動 つてどこにでも行けるのか？」

俺はなんとか冷静さを保ちながらエルに聞く。

「ん~。正確には違うかな。ほら地面を見て。なんか書いてあるでしょ？」

「ああ」

地面には外郭の円が描かれておりその中には文字や記号が書かれていた。

「これは移動結界つて言つて、この結界があるとこだけに移動できるの」

（よくわからんねえけど・・・。まあいいや）

「入り口の前で話すのもなんじや。早く入ろうぞ！――

ガイルが泣きそうな声で叫んだ。

「そつか。ごめんごめん。じゃ中に入ろ」

俺たちは家に入りテストの内容などを話していた。

第1-2話・クラス昇格（後編）（後書き）

名前：蓮崩（家族がないため名字はありません）

容姿：髪は赤の入った黒 瞳は黒 14歳 身長165cm 体重52kg

性格：本人曰く「おとなしい」周りから見れば「短気」

戦闘スタイル：合剣（魔導や体術もできる）

名前：里崎 聖

容姿：茶の入った黒（長髪） 瞳は黒 14歳 身長152cm 体重は秘密

性格：普段は優しく真面目だが、怒ると【危険】

戦闘スタイル：なし（足技（右足のみ）は凄いらしい蓮崩体験済み）

名前：ペエル

容姿：髪は短く青色 瞳は血のような赤 14歳 身長159cm

体重 本人曰く41kg

性格：聖とほぼ同じ 明るい

戦闘スタイル：魔導（別な力もあるらしい）・・・

名前：ガイル・ジエラルド（やつとファミリーネームが出た）

容姿：緑の髪（短かすぎず長すぎず） 瞳も緑 10歳 身長146cm 体重42kg

性格：真面目 ジジくさい・・・

戦闘スタイル：合剣（体術も凄い？）

以上です。わからないことがあつたらメッシュページに書き込み（出来るのかな？）しておいてください。後書きに書くと思つんで。

第13話・危険！！

「なあ？ プエルは？」

俺は茶の間でくつろいでいるガイルに聞いた。

「いないのか？ ジヤあ、今日は一日いないじやろ」

「なんでだよ？」

「さあ・・・。わしにもわからん。

プエルはたまにいなくなるからのう」

俺は（今日はやけにジジイみたいだな・・・）と思った。

「なんかいないと困ることでもあつたのか？」

「別に」

俺はそう言い、ほりコタツに入り座つた。

「もしやお主・・・」

「？・・・なんだよ？」

「プエルに惚れたか？」

ガイルのあまりの発言に俺は飲んでいたお茶をガイルに吐いた！！

「ゴホッ！ ゲホッ！ ・・・ありえねえだろ！ ？ エホッ ・・・」

「そうじやの・・・。言つだけ損じや ・・・」

ガイルはそう言うとタオルで顔を拭いていた。

「そういや、俺今日仕事入れる予定だつたんだ。

クロームハウスに行つてくる」

俺はそうガイルに言い残しクロームハウスへ向かつた。

「ようよつー！ 金貸してくんねえかなあ？」

「俺たち今日金なくて困つてんだ」

俺はハウスへ向かう途中に不良にからまれた。こうい「う」とは日本でもよくあつたからなぜか懐かしい感じになつた。

（そういう聖どうしてんだろ？）

不良A「聞いてんのかよ！ ？ 兄ちゃん！ ！」

「こやまつたべ」

不良B「面倒だ！やつちまおうぜ！…？」

不良C「やつた後に金盗ればいいんだからよ?」

なんか俺が弱いみたいに話す不良たち。・・・ちょっとむかついてきましたよ？

不良A ー そ う だ な ? ピ ャ ツ ハ ア ! ! !

(倒すだけなら合戦はいらぬいたる?)

なせが合戦を出でることまで考へてしまつてはいたが、今は田の前の不良を倒すことに専念した。

を並べる。

魔女では御馳走下泉の首ノカツ / 萩

不良の恥部を蹴り上げた。

弱いな……これで恐喝するなんてな

俺は不機嫌なまま家に帰つた。

俺は家に着いても苛立ちは消せずに玄関の戸を開けた。

おかげで、もう外方にしゃべるそんなんは依赖は力變じやうがのかう

正確には1撃ずつしかいれてないのだが、そこは黙つ

それでハウスに行かなかったのか?ハナシやの?・・・

「腹減つた。…。
メシは？」

今作っている。もう少し待て。

「まだ帰つておいたはねり・・・。氣配がすねのう」

俺はいつのまにか人の気配を読むことが出来ていた。危険な依頼をやらされて得た力だらう・・・
(ただいま・・・)

玄関からプエルの声が聞こえた。帰つてきたらしい。

「お帰りプエル。」

俺は玄関に行きプエルを迎えようとした。しかし、温かく迎えることはできそうにない・・・
血を流し玄関にもたれかかるように倒れしていくプエルを見て俺は

「ガイル！！医者だ！！！医者呼べ！！」

とガイルに叫んだ。

「なんじゃ？騒がしい。どうかしたのか？・・・プエル」

「いいから早く！！このままだと死ぬぞ！！？」

俺がそう言つとガイルは急いで家を飛び出し医者を呼びに行つた・・・

・
ガイルが出て行つて3分後ぐらいにプエルはつわ言のよつて咳きだした。

「お父さん・・・。お父さん・・・」

(お父さん?)

俺はその意味がわからなかつた。

「プエル？」

「お父さん・・・。あたしは人間のままでいたい。・・・には・た・・
・ない」

「！――！」

俺は今の言葉を聞いて自分の耳を疑つた。俺の耳がおかしくなつてしまつたのではないかと。

(人間のままでいたい！？どういうことだ？プエルは人間じやないのか！？)

様々なことが頭に浮かぶ。

そんな時にガイルが医者を連れて帰つてきた。

「連れてきたぞ！－！ プエルは！－？」

「ここに寝かせてある」

「そ、うか・・・。ゼシルド！－早く見てくれ！－」

ガイルがゼシルドと言つた男は22・3歳くらいで整つた顔立ちをしている。

「ああ。わかつている！」

ゼシルドは聴診器を耳にかけ心臓の音を聞いたとPHILの上着を脱がせる。

「つ－！－！俺茶の間にいるよ・・・」

俺は居たまれなくなり部屋を後にした。

数十分すると、ガイルとゼシルドが茶の間に来た。

「どうだつた？」

「精神的疲労が凄い・・・。肉体的疲労がないとはいえ血を流しきていてる。

危険な状態だよ」

「俺、なんかすることあるか？」

「残念ながらこれは本人の体力や精神力の問題だ。他人が助けられるものではない。

それに素人が無理になんとかして容態が悪化したら大変だ・・・」

ゼシルドは冷静に言う。

「とりあえず、明日またくるよ。容態が悪化したらすぐ呼んで」

ゼシルドはそう言い帰つた。

「なんでプエルがあんなケガしてんだよ・・・？」

「まだいいほうじゃ・・・。お主がくる3ヶ月前なんて、間違いなく死んだと思つたよ。

あれは」

「【あれ】？」

「そう」

なぜかガイルは話さなかつた。話したくなかったのだらう。俺も無

理に聞こうとは思わなかつた。

「・・・・・ プエルはのわしを拾つてくれたんじや」

「拾つた? お前捨て子だつたのか?」

「そうじや。そのときのプエルは殺氣の塊のような女じやつたがな・
・・・」

俺はプエルを恐ろしく思つた・・・

「とりあえずは、プエルが目を覚ますのを待つだけじやな・・・
メシでも喰おう。腹が減つて餓死したら意味ないから」

「ああ。 そだな・・・」

俺とガイルは一人で冷たくなつた夕食を食べた。

幕間・欲望（前書き）

話の間に詩を入れました。

変な詩ですが頑張って書きました。

幕間：欲望

私は人間ではない 私は人間がいい

命があれば外にいける 躯からだがあれば自由になれる

躯が欲しい 自由が欲しい 心が欲しい・・・

思ひが欲望になつて形作る 私の家の守り番になる
友が出来た 仲間が出来た かりそめの躯からだで

この繋がりを消したくない

私の心 私の躯 私の自由 私の・・・

あの人は私を許さない 友を 仲間をつくつた私を

そしてあの人は仲間を 私を殺すだろう

私は守る たつた一人で 誰も巻き込まずに・・・

躯が欲しい 自由が欲しい 心が欲しい・・・

かりそめの躯 かりそめの心 かりそめの自由

すべてが本当で すべてが嘘

あの人を殺せば・・・ 仲間を殺せば・・・ 自分を殺せば・・・

すべてが戻る　すべてが現実になる　すべてが無になる・・・

躯が欲しい　自由が欲しい　心が欲しい・・・

あの人は私を必要としている　邪魔な人を殺すために

私はあの人の人形　私は殺すために育てられた人形

躯が欲しい　自由が欲しい　心が欲しい・・・

子供を拾つた　小さい子供　無邪気な子供

私についてくる　こんな私でいいのなら連れて行くよ？

異世界から来た少年に会つた　私と同じだろつか？

その少年にいろいろ教えた　殺すこと意外知らない私が

この繫がりを消したくない　私は守つてみせる　この繫がりを

躯が欲しい　自由が欲しい　心が欲しい・・・

幕間・欲望（後書き）

指摘でもなんでもいいのでメッセージに書き込んでくれたら嬉しいです。

まだまだ未熟ですが頑張りたいです。

第14話：一人（前書き）

がんばつて2日おきに更新しています。

第14話：二人

「なあ、なんで……」「

「ん？ 何か言つたか？」

俺はガイルに言いたい事が言えなかつた。

「いや、なんでもない……」「

「そりが？」

この会話がずっと続いてる。

「プエルって両親いるのかな？」

俺はガイルに質問した。

「いるのではないか？ 呟くほどじやからの」

（ガイルもあの言葉を聞いたのか？）俺はそう思つた。

「なあ、プエルの【家】って何処にあるんだ？」

「ここではないか！ 何を言つておるのじや？」

「そうじやなくて……。ここに来る前の、生まれたときの家だよ」
俺はそこになにかあると思いガイルに場所を聞く。

が、ガイルは

「わからん。多分そこに手がかりがあるとふんでいるのじやろ？」

と、あたかも俺の心を読んでいるかのように話す。

「血の痕をおつて探すのもいいけど、時間がかかるしな……」

俺がそういうとガイルは

「そりが。それじや！」

と大声で言つた。

「なんだよ！？ 大声出して」

「だから血の痕をおうんじや！……」

ガイルは真剣な顔で俺を見て言つ。

「だから、時間がかかりすぎるだろ！……」

「ふふふ……」

ガイルは含み笑いをしている。怖い……

「わしの精靈はなんだつたかな?」
(なんで軽く敬語になつてんだ?)

「えへと・・・。地 だつたつけ?」

俺は思い出すのに3秒ほどかかつたが思い出すことが出来た。

「そう。だから、精靈に頼んで血の痕を追つてもひりつんじや。来い
!—!」

そう言いガイルは外に出た。

俺はプエルをベッドに寝かせ外に出た。家の施錠もちゃんとして!—!
『我に託されしは堅固たる地の力。我的命を聞き入れ我に従え』
ガイルがそう言つと小さい岩 石と言つてもいいだろう
を召喚した。

(ガイルが言つと違和感ねえな・・・)

俺はそんなことを考えていると

『我が仲間プエルの血の痕を追え』

そう言つと虹は中空に浮かびながら俺たちを導いた。
歩いていくと町を出てトルナ草原に向かっていく。

「こんなに遠い所からプエルは歩いてきたのか・・・。
あの体で」

俺は驚くといつより感心した。

「まだ歩くらしいな・・・。たくあの馬鹿者は我等に話せばよいものを!—!」

ガイルが怒る。

草原をだいぶ歩くと暗い森に入り、森を抜けると崖があつた。

「まさか・・・?ここ登るのか?」

「そつらしいな・・・。できるかレンホウ?」

「自信薄・・・だな」

俺たちのテンションは極端に落ちた。例えるなら、お笑いの有名人
のネタの後に素人芸人が舞台に上つた感覚だろう。

「ま、登るしかないんだろ？」

「そういうことじゃ。行くぞ！」

そう言い俺たちは崖を登った。

「これ・・・。突起岩がないから・・・。大変・・・だ。」

「つべこべ言わず・・・。さつさと・・・。のぼ・・・れ。」

登っているために会話も出来なくなつた・・・

ようやく登り終わつたら田の前に巨大な城があつた。

「ほお～・・・。立派な城じやな」

「驚くのはそこじゃねえ！ここがプエルの【家】！？家じやなくて城じやねえか！」

俺はガイルにキレた。

「まあよい。行くぞ！」

（切り替え早つ！）

そう思いながら俺はガイルの後についていき、門の前まできていた。

城の門はしっかりと閉まつていて入れそつこはない。

「ここは任せて。

能力変換 身体強化 トリス！」

俺は言靈を発し4mはあるであろう門を軽々と飛び越えた。

「たくましくなつたもんじゃな」

ガイルが言う。

「そりや1ヶ月もたつて進歩なかつたら逆に怖いだろーまあいいや。ちょっと下がつてろ」

俺がそう言つとガイルは軽く頷いて5・6歩下がつた。

「能力変換 衝撃 トリス！」

俺は片手を前に出して言靈を発し手から出た衝撃で城門を吹き飛ばした。

ガイルは俺が吹き飛ばした門を見て

「かなりの威力じゃつたな」

と驚嘆の吐息をもらした。

門の中は中庭に通じてあつた。しかし、ゆづれと歩こてまへるに
とまできなこりこ。

俺とガイルは背中合わせになり中庭の真ん中にいた。周りには全身が緑色の人の形をした化け物が約100体ほどいる。

「どうあえずここいらを近づけねはな」

— そ う だ な。 行 く か 」

ガイルは大剣に俺は曲刀に変化させた。

曲刀が1番使いやすくてな

いく。
そんな会話を少ししたら俺たちは正反対の方向へ走り、敵を倒して

いく。
俺は曲刀で敵の首や足を切り落とし、ガイルは大剣で敵を殲滅して

てへる。

「さすがに疲れる・・・。つたく多すぎなんだ・・・よーーー!」

ガイルはそつ言ひながら敵を鐵威して、一ぐが、

達していた。

(使いたくなかったが・・・仕方ないか)

「なぜじゃ！」

「あいつ】を呼ぶ

ガイルは驚いた顔になつたがすぐに状況を理解して扉の前に走つた。
『我に託されしは大いなる殺戮の使者。我的体を汝に捧げる。汝の
力存分に發揮せよ・・・

【トリス】

そう言い俺は意識を消した。

ここからは作者視点でお楽しみください

蓮崩が意識を消すと髪がオレンジに変わり、殺気が溢れ出した。

「今回だけお前の言つことにしたがってやるよ！宿主さん」
(化け物だけを倒せ。そつしたら終わりだ)

「りょお～かあ～い」

精霊【トリス】は馬鹿にしたように返事をして姿を消した。
正確には消えたわけではなく田には見えない速さで移動しているのだ。

「全然弱えなあ！！ヒヤハハハハ！！！」

トリスは狂気に侵されたように笑いながら次々と敵を殺していく。
化け物は5分経つただろつかという短い時間ですべて皆殺しにされ
ていた。

「まあ楽しかつたぜえ・・・じゃあな」

そつ言つうとトリスは意識を消し蓮崩に戻つた。髪の色も。

蓮崩視点に戻ります

(凄まじいな・・・)

俺はそう思いガイルの所へ行つた。

「相変わらずじゅつたぞ」

「わかる。今回は見えたよ」

俺たちは扉の前に座り軽く体力を回復しながら会話をしていた。

「そろそろ行こうぜ・・・」

俺がそう言つと

「そうじやな」

とガイルが言い、扉を開けた。

扉を開けて中を見てみたらそこには信じられないものがいた・・・

第1-4話：一人（後書き）

多くの読者に楽しんでいただけるように頑張つております。
無駄かもしませんが絵師さんを募集しております。
やってみたいという人はメッセージに書き込みお願いします。

扉を開けて見えたのは、だだっ広い廊下。鎧は横に並べられている。そして奥が見えない通路。

【左右対象シンメトリー】とは「このことをいつのだろひ。けれど現実はそうじやなかつた。

短い通路があり扉がなく柱を境に上り階段と下り階段がある。そして、柱の前には10歳ほどの女の子が2人・・・

「なあガイルこの屋敷の主人つて・・・」

「奇遇じやなわしも同じことが浮かんだ」

俺とガイルは口を合わせて

「「口リコン?」」

「違います。私たちは魔導で動いている人形です」

一人の子供は感情がない声で冷静に話す。

「ここからは1人ずつで行つてもらいます」

俺達は意味がわからず頭に疑問符を浮かべた。

「じゃ、片方の階段を選べつてことか」

「はい」

子供は優しく微笑む。俺は口リコンではないので興味がない。

「じゃ、わしは上りを行くぞ」

「じゃあ、俺は下りか」

俺たちは軽く手を合わせ無事を祈り一人ずつ子供の後に続いた。ガイルと子供はさながら幼馴染のデートのようだ。

階段を下りていくとそれこそ俺が思っていた通路が現れた。

「なんで2つの道があるんだ?」

俺は子供に質問をする。実際作り主に会つて聞いてみたいほどだ・・・

「さあ・・・。私はそのようなことは教えられていないので」

（なるほど・・・。最小限のことを教えるだけなのか）

俺は納得して歩いていると扉が見えてきた。

「どうぞ。」そこからは私の案内は必要ありません。一本道ですので「子供はそう言つと深々と頭を下げ、きた道を歩いて帰つた。

俺は扉を開け部屋に入った。

この部屋はクロームハウスの昇格テストの部屋に似ている。正方形の部屋だが唯一違うのは真ん中にある柱とそれに付いている部屋の端まで火炎球が届くであろう重火器。

（ここで一体何を？まさか拷問か！？）

俺がそんなことを考えていると部屋の天井についてあるスピーカーから声が聞こえた。

「ようこそお客人。私がこの城の主【テュノン・デル・シェル】です。これは私が楽しむための部屋です。お客人も楽しんでいただければ結構です。」

（異常だな・・・）

俺がそんなことを考えていると奥の扉が開き人間より少し大きい（推定3m）人が出てきた。

「さあ、お楽しみください」

「たく！能力変換・・・」

「バチッ！」

強力な電磁音がして詠唱が途絶えた。

「言い忘れていましたが、この空間は魔導が使えませんので」
（先に言え！）

俺は気分を切り替え、拳を握り敵に向かつて走り出した。

敵は軽くそれを避け俺の腹に蹴りを繰り出す。

俺は蹴りを両手で受け止めるが敵は構いなしに振りぬく。俺は壁に叩きつけられそうになるが体を回転させ壁に足をつき、壁を蹴つて敵の顔を殴る！

だが、違和感を感じた。まるで岩を殴ったような感触。俺は敵から

出る殺氣を感じ取りすぐに敵から降り後ろへ飛び退いた。

（なんだ！？こいつの固さは）

俺は不思議に思った。硬度・殺氣・力。どれも人間のそれよりはるかに高い。

「グウオオオオ！！」

竜の如く唸り声をあげると地面を殴り、割った。

よくわからないがこれを好機と思い俺は顔面に飛び蹴りをしようと跳んだ。

が、敵はこれを予測していたのか跳んできた俺の足を掴み地面にたたきつけた！

「ゴハツ！なんつー力だ！」

俺は口から血を吐いた。背骨が折れそうだったが、これ以上くらえば危険！と判断し敵の手から脚を抜き壁に背中をつけた。

（魔導さえ使えればな・・・）

俺がそう思つていたらスピーカーから声が聞こえた。

「見るにたえませんな。お客人、スピーカーを壊してください。そうすれば魔導が使えますよ」

「本当か・・・？」

俺は敵の蹴り・拳をなんとか避けながら会話をする。

「本当です。スピーカーには私の魔導が込められていますからそれを」

ガシャン！！

俺はすべてを言い終える前に敵の肩に乗り上に飛びスピーカーを蹴り壊した。

「これでオッケー！ト里斯！」

俺は言霊を発し合剣を出し、大剣に変化させた。

「これで終わりだ！！」

引きずるように大剣を持ち敵に向かつて走り、俺は敵の足を切り落とした。

敵は崩れるように倒れ灰になつた。

「やっぱり人間じやなかつたか。」

途中から気づいていたが灰になつたことで確信できた。

（それよりあの重火器はなんのいみがあつたんだ？）

俺は考えながら灰の中から鍵を見つけ来たところと反対側に位置する扉を開いた。

――――――――――――――――――――――――――――――

「やれやれ面倒な城じや」

わしはそう思いながら通路を進んでいく。

「あなたお年は何歳？」

「10歳だが・・・。それがなにか？」

女の子はわしに年を聞いてきたがそれ以外会話はなく扉の前にきた。

「では、これより先は一本道ですので」

「さつきも一本道ではないか」

「本来は魔導の罠が張り巡らしてあり迷路になるのです。多分さきほどいた人も同じ場所を通るのです？」

わしは意味がわからなかつた。そんなことも知らずに女の子は微笑んでいた。

扉を開けると円形状の部屋があつた。すると奥の扉からいかにも武闘派という感じの男が出てきた。

「我が名はモース。さあ、我と一騎打ちを」

モースと名乗る男は戦闘の構えにはいりわしを待つていた。

「いこでは魔導は使えん！無駄なことはやめて死ぬのも美德だぞ」

「面白い！その自信打ち碎いてやるう！」

わしは拳を握り、構えをしてモースに向かって走り出した。

モースはそれに合わせるように拳を繰り出した。
(なるほど。これはレンホウでは避けきれん。こっちでなくて良かつたのうレンホウ)

わしは紙一重でそれを避け腹に拳を数発。足払い。そして倒れたところに肘打ちを流れるようにたたき込んだ。

モースはそれで氣絶したらしく。

「ふん！【GEHES】（ドイツ語で「靈の意味」の破壊神。ガイルを甘く見たのが運の吸きじやな」

レンホウには言つてないが、わしとPHILIPPEのペア【GEHES】なのじや。この名前を出せばほとんどの人間は知つているというほど有名じや。

だが姿を見たものはいなく、それ故にGEHES（「靈」と呼ばれるようになつた。

そんなことはさておきモースの腰に付いていた鍵を奪いわしはその部屋を出た。

第15話・戦闘（後書き）

GEISTの読みかたはわかりません。
こんな話が読みたい。というのがあればリクエストを受け付けてます。

第1-6話・激怒（前書き）

昨日は諸事情があり更新できませんでした。
文章を少し変えて書きましたので混乱するかもしれませんのが多分大
丈夫だとおもいます。

扉を開ければさつきとなんら変わりない通路がある。そこを歩いているとなにやら笑い声が聞こえた。

クスクス・・・ ケタケタ・・・

怒りの感情が沸き上がってくる。この笑い声のせいだらうか？ 大分歩くと直角の曲がり角があつた。奥には気配が一つ・・・。相手も俺のことを察知したのだろう。気配が消えた。

俺は戦闘体制に入り合剣を曲刀に変化させ足音を消し曲がり角に近づき身を隠す。

曲がり角から体をだし切りかかろうとした。そのときー

勝負は一瞬だつた。ガイルの拳が見事に腹にクリーンヒット。うずくまる俺を見てガイルは一言

「なんじや。 お主か」

殺してえ・・・

ガイルは敵かと思い殴つてしまつたらしい。まあ許してやろひ。俺も襲つてしまつたから。

「そつちはどうじやつた？」

「どうつて何が？」

「戦つたのか？ という意味じやー」

面倒くさいがガイルに戦つた相手のことを話す。

「厄介じやつたの。ここを出て2・3日したら体術の修行をしてやる」

断固拒否したいが俺に選択権はないだろう。

そんな話をしながら奥に進んでいくと、壁全体が扉の前に来ていた。

「これ開くのか？」

「やつてみなければわからんじやる。手を貸せ！ 一人で開けるぞ」

ガイルと協力して扉を押すがびくともしない。

（ぶつ壊してやろうか？）

トリスの声が頭に直接流れ込んでくる。

「いらねえよ。俺たちだけで充分だ」

実際二人だけでは足りないがトリスの力は借りたくない。俺の瘤にさわる。

「あいつか？」

俺が頷くとガイルは

「精霊なのに話せるとはな」

話すことは慣れたが話すとムカつくから話したくない。俺がそう言

うとガイルは

「ハハハ。大変じゃのう。それにしてもこの扉はなんじゃ？全然動かん！」

ガイルが愚痴っぽく話すとせつまで聞こえていた笑い声が変化した。

（ねえ、困つてると？クスクス・・・）

（助けてあげようよ。ケタケタ・・・）

寒気がした。蛇が首に巻き付き舌なめずりをしているような嫌悪感のような寒気が。

笑い声がおさまると横に並べられていた鎧が二つ動いた。

俺とガイルはすぐに戦闘体制に入った。

だが鎧は

（僕たちは手伝つてあげるだけ。危害を加えるつもりはないよ）
と子供のような声を出し、扉の前に立つた。そして二つの鎧は扉を押し、開けた。

完全にそれを開けたら鎧は二つとも倒れた。

扉の奥には豪華絢爛と言つただろうか？部屋の至るところに装飾品や肖像画などが飾られている。そして扉を開け真っ直ぐ奥まで歩く通路には血を吸わせたような色の赤絨毯。奥には段差があり上りきつたところには玉座が一つ。そしてそこに座っているのは、黒い口

「アーブを羽織り、黒い長髪。口には牙。そしてアエルと同じ血のよう
な赤い瞳。そしてとめどない殺氣を放つ男がいた。

「よくここまでこれましたなお客人」

「あんたがテエノンか?」

男に問うとやうです」と頷く。

「お客様はどうでしたか？楽しんでいただけましたか？」
もちろん楽しめるはずはない。だがそんなことをこの男に言つても
意味はない。二口つゝー。

卷之二

（無不空指 異傳弘仁 一ノ子）

言靈を喰き俺は一気に元二ノンとの聞合せを詰めるか見えた壁に当たり近づけない。

「レンホウー・・・なんじゃ？」の見えない壁は

「壁ではありません。[斥力]です。物体を遠ざける

デュノンは余裕の顔で俺たちを見る。いや、見下している。

「魔導だな・・・」

「さすがお客様鋭いですね。どうですか?殴り合いなどせず食事でも

「食後のワインは格別なものを用意しますが？」

デュナンは自分の力を教えてまで余裕の姿勢を崩さない。いや、そ

の力すらどうでもよいものなのかもしれない。

食後のワインとは? デュノン公爵

ガイルが問いかける。そして返ってきた言葉は

「もちろん《処女の生き血》ですよ」

プリンシ

俺の中で何かが切れた。そして溢れた感情は殺意！

(殺す・・・)

「何か言ったか？レンホウ？」

ガイルが何かを言つてゐる。

もう蓮崩の耳には入っていない。

殺す。殺す！殺す！！

デューンとの間合いを詰めるが、また斥力に邪魔をされ前に進めな

い。

「消えろ・・・・

変換 消失 トリス」

斥力の壁を消し去り間合いを詰める。

「レンホウやめろ！ その男はエルの父親じゃぞ！ ！」
ガイルが何か言っている。もう俺には聞こえない。

「危険なお客人だ。消えていただく！」

『影より生まれし闇の長全てを滅せ！ ！』

「特殊魔導じや！ 下がれ！ レンホウ」

デュノンの影から出てきた黒い剣は俺を刺そうと向かってくる。

『『我が命に従いて現れたるは輝きを失つた聖者。冥府を彷徨い得た力、今悪鬼となりてもたらさん』』

詠唱が終わり影から墮天使のような姿の何かが出てきた。

「なんじゃ？ この魔導・・・・レンホウのものではない。トリスか？』

「心配するな。俺だ。蓮崩だ」

ようやくガイルの声が聞こえる。怒りが収まってきたらしい。

墮天使はデュノンがだした黒剣を止め、その剣を自分の武器にかえデュノンを刺した。

「なかなかですね。お客人・・・・」

「知らねえよ。それはキレてるときに出したんだからな」
（なるほど・・・・つまりあれは偶然の産物。運も実力のうちと言うが・・・・。

あの魔導はわしが知る限り【魔】の属性最強魔導じや。しかもそれを扱えるのは魔族のみ・・・・

ガイルは皆に聞こえないように呟いた。

デュノンを刺している黒剣が消え、間をおかず墮天使も消えた。

デュノンは片膝をつき肩で息をしている。それほどの威力だったのだろう・・・・。

「はあ、はあ・・・・。このガキがあ・・・・！ ！ ゆるさねえ・・・・

デュノンの性格が一変した。

ガイルは何かに気づいたように

「レンホウ！こっちへ来い！！殺されるぞ」

デュノンから殺氣があふれガイルの声が聞こえた。俺は危険と判断し、段差を飛び越えガイルの隣に着地した。

デュノンを見上げるともはや人間（吸血鬼）の姿とは思えない。体が4倍に膨れ上がり破裂。そして霧散した体は玉座の前に集まりなにやら形作っている。

黒い球体。そこから生えた6本の足。そして顔には血のよくな赤い眼が三つ。もはや蜘蛛と言つたほうがいいだろう・・・

「ガイル・・・」

「なんじゃ？」

「俺、蜘蛛かなりダメなんですけど・・・」

「しかしこのままでは殺されるぞ？腹を括れ」

そんな会話をしたあと、俺たちは剣を出した。

ガイルは大剣・俺は長刀（魔導を帯びることが可能にしたもの）に変化させ構える。

チキ・・・チキ・・・チキ・・・チキ・・・

蜘蛛は何かを言つている。そして、行動に移つた。

第1-6話・激怒（後書き）

作者は蜘蛛は嫌いです。それはもう嫌です！！
見つけたら後ずさりするほど嫌です。
感想・批評をお待ちしております

第17話・決着

「能力変換 衝撃 トリス。《帶びろ》！」

長刀に魔導をかけ強化を施し元吸血鬼『ユノンに近づく。

チキ・・・チキ・・・

蜘蛛は払うように一本の足を振る。

俺は刀を振り降ろし刀の先から圧縮した衝撃を放つ。

「ほう・・・・。そんなことが出来るようになつていたとは驚きじやな」

ガイルはそう言つているが別段驚いてはいない。ちょっとムカつく・・・。

「衝撃の刀だ。刃は当たらずとも衝撃が当たるぞ！蜘蛛野郎」衝撃で蜘蛛の足を止めガイルが足を切り落とす。

という作戦だつたが蜘蛛は粘着性の糸を吐き出し俺の腕を絡める。

「レンホウ！おのれ・・・死閃煉獄衝！」

ガイルは大剣振り降ろし糸を切り刻む。この技はおそらく超高速で剣を振り降ろして力マイタチを発生させる技だ。一回しか振り降ろしてないように見えるのはガイルの剣の振る速さが速すぎるためだろう。それにしても大剣をそんなに速く振れるのは凄い・・・。もうバカと言いたい。

まあ、それはおいといて。

糸が切れ自由になり俺はもう一度衝撃を飛ばす。

衝撃は蜘蛛の眼に当たり一つの眼を潰すことが出来た。目の前の光景はまさにスプラッターショー。

吐き気を催したがなんとかこらえ蜘蛛に向かつて走り出す。

「まったく。眼を潰されても生きているとはな・・・」

ガイルが呟く中俺は思った。

眼を潰されても生き物は死なない。そんな簡単に死ぬなら竜討伐も

苦労はしないだろ・・・。と

耳をつんざくような叫び声を聞き、耳を塞ぐ。しかしこの行動が仇になつた。ガイルが何かを言つていたが耳を塞いでいたために聞こえず死角の背中から来る攻撃に反応が一瞬遅れた。

「レンホウ！」

蜘蛛は頭を瞼おうといひひに來る。何んなこは瞼われたくないな
力イ川か叫ぶか今俺は激痛のあまり声すら出せない
あ・・・。

そんなことをのんきに考えているともう蜘蛛は眼の前にきていた。三つある腿のうち一つは潰れ紫の体液を流している。

だ。 帯びさせていたのも衝撃たが能力を変えてなければ效果はそのまま

蜘蛛は一瞬体が浮いた。ガイルはその隙をつき蜘蛛の背中に乗る。「これで終わりじゃ。レンホウ早く腹下から出てこい。潰れるぞ」「わかつてゐるよ・・・ト里斯!!」

詰めのないところに衝撃を放ち、その反響でかほの力蠍蠍の力が止

「よし。くらえ！【地影天墜】（ちえいてんつい）ー！」

ガイルは天井近くまで飛び上がり——この部屋の地面と天井の高さは目測約8m蜘蛛の体長は4mほど——体を回転させながら落ちてくる。目は回らないのか？

そして蜘蛛の背中に大剣をたたき込む。そして蜘蛛は…
見事に粉々に飛び散った！紫の体液を周りに飛ばして。そして俺は
思つた。

・・・泣いて良いですか？

わき腹の痛みに耐えながらも恐怖する。飛び散った生き物ではなく
ガイルに。

「ふうー。。。レンホウ大丈夫じゃったか?」

心配そうにガイルが話しかけてくる。

「ダイジヨブなわけねえ！わき腹えぐれてんだぞ！っつつつ……」

無駄に叫んだため体に激痛が走る。

「能力変換 癒し トリス」

言靈を発し体を癒しながらだが説明しよう。魔導は集中力さえあれば上級魔導も使えるらしい。エルがいう話ではだが。とりあえずの応急処置だけはすませたがさすがに痛みはある。なんとか立ち上がり体を動かす。よくよく体を見ると全身が紫だ。これは怖い！ゾンビと言つても誰も疑わないほど怖い。

「ハハハハハツ 淫いことになつておるぞ」

ああ、殺してえ……。貴様が原因なんだぞこの野郎。瞬時に思つた。

「つたく。能力変換 水 トリス！」

手を天井にかざし言靈を発し水球を天井に放つた。

それは天井にぶつかり破裂して雨に変わつた。俺は雨で蜘蛛の血を洗い流した。

「能力変換 風 トリス」

そして風を周りにおこし濡れた服・髪を乾かした。魔導は日常生活でも使えるから覚えておいて損はないらしい。魔導式を書いたときの痛みを我慢できれば……。

「なんじゃ戻つたのか。面白かったのに」

このじるガイルの性格が悪くなつてきた気がします。元々の性格なんでしょうか？

そんなことを考えながらガイルを見るとても悲しい顔をしていた。

「どうしたガイル？」

「わしらはエルの父親を……」

「あつ……」

「どうすればいいんじゃ？」

無言の時間が流れる。

そんな時入り口の通路の奥から足音が聞こえる。

ヒタヒタ・・・

裸足なのだろうか？足音は極めて低い。

「誰じや？」

「わからない」

歩いてくるものを見つている。そして見たものは中庭で見た全身縁色の化け物。それも一回り大きいものが歩いてきた。

俺たちはすぐさま戦闘体制に入った。ガイルは足元に置いてある大剣を持ち、俺は少し前にある刀のところへ行きそれを拾う。そして俺たちは化け物を見た。だがそこにいたのは、通路いっぱいの縁の化け物だった。

「どこにいたんだ！？こんなに

「大方、天井にでも擬態していたのじやろ！行くぞ！死閃

「待てガイル。なにか言つてる」

俺たちは攻撃をやめ声を聞いた。

（ありがとう・・・）

（これで自由になれる・・・）

（心がもどる・・・）

（躯は朽ちたと伝えてくれ・・・）

「どういうことじや？」

「俺が知るかよ・・・」

化け物たちはそういうと幻の如く消えた。そして俺たちは城を出た。

第18話・討伐

城での出来事から約一ヶ月が経つた。この一ヶ月の間に俺はACKラスにまで上がった。

の一件以来プエルは明るくなつた。
ん?父親を殺したから暗くなるはずだつて?それがプエルはいつも言つてくれた。

「あのね、お父さんやあたし。つまり魔族はこっちの世界じゃ死はないの。魔界に強制的に戻つて力を蓄えるのよ。3年くらいものすごいアバウトな説明だつた・・・

朝、俺は食事当番だつたため早く起き朝飯を作つた。

といつても簡単に白米と味噌汁。それにオカズを3人分。
しばらくすると寝ぼけ眼でガイルが起きてくる。ちなみにガイルは寝ぼけていると普通の子供のしゃべり方になる。いや、戻るといったほうがいいのか?

「おはよお〜〜・・・・。あれ?プエル姉ちゃんは?」

とまあ、こんな感じに。最初聞いたときは持つっていた味噌汁鍋をひっくり返すぐらい驚いた!

プエルは朝の寝起きは最悪だ。このごろは

「プリンってカツコいいよね〜〜・・・」

という訳のわからない寝言を言い出すほどだ。仕方がないから俺が起こしに行くことになる。

プエルの部屋はまさに女の子という感じの部屋だ。説明じづり〜・・・

「プエルー。朝だぞー。おーきーるー!」

「あと〜ふん・・・・」

ベタだ・・・。まあ五分も待ってるほど俺は優しくない。

早く起きないとヌ王イ」とするぞ?」

「…………」と、やがて、彼の声が聞こえた。

別は考えていない」と早く起きでほし

河を流つて一るんだ」の吸血鬼。
へたこ井

何を言つてゐるかこの吸血鬼へたゞさして血めがれたらどうする。

「アーニー、おまのやうに思は

(能力変換 音 · · ·)

そりと喰くそして

「うひゅあ！？何！？フギヤー！」

あたりに鶏の鳴き声が大音量で響きわたる。

軽く皮肉を入れ朝の挨拶をする。プエルは驚きのあまりベッドから落ちたようだ。

「ナ、足あたつまご悪ハ

そんな会話を少しした後、部

イルがテーブルに突つ伏して寝ている。

こいつもか・・・。ま、ガイルは子供だからな・・・。
大人からみればプロも子供だが俺と同じ年なので容赦

「ガイル。寝るな。飯食うぞ」

まあ、そんなこんなで一日は始まつた。

珍しくクローム用の携帯が鳴り出す。携帯を取り通話ボタンを押し

た。

『レンホウ君か?』

「はい。そうですけど・・・。どうしたんですか?」

電話の相手はクローム全権指揮のギルドシステム・ファルクからだ。

『いや、他の二人に言えばわかると思うが クリムゾン がダルナ山脈に現れたんだ』

「くりむぞん?」

その単語を聞いた二人は驚いていた。

『ああ。全クローマーはそれを討伐してくれ。報奨金は100万ギルドだそう』

「わかりました。この依頼にクラスは関係あるんですか?』

『Aランク依頼だ』

「了解。じゃ失礼します」

そう言い携帯をとじる。

二人を見るとなにやら討伐の準備をしている。やる気マンマンだな・・・。

「なあクリムゾンってなんなんだ?」

「竜よ。人語を話せる」

「あやつは別名や異名が多すぎるからの。体色が紅色あかなのでクリムゾンと呼ばれている」

「他にはどんな呼び名が?」

「竜帝・神竜・紅の牙そして、烈火・・・」

烈火・・・。その名前には聞き覚えがある。俺は小さい頃親が移る度名前が変えられていた。そして、毎回つく名前が烈火・・・。

俺はその名前がイヤで蓮崩に名前を変更した。が元の名前は烈火だ。このことは俺以外は誰も知らない。

「ダルナ山脈だつてよ。クリムゾンがいるとこ」

俺は二人に教え、行く準備をする。と言つても別に服も恥ずかしくない程度のものを着ていけばいいだけ。準備が終わり俺たちは北。ダルナ山脈を目指す。

山についた俺たちはひとまず休んだ。竜の気配もしないから安心だ
る。ひ。

休んでいるとまた他のエーラにいたりもん」ほざかれるのが気がくわないが・・・

「どうした僕たち？早く帰つたら？」

「あらあ、子供じゃない？ あなたたち二人などいっつもダメよ？

あいへ・クローバー・」みんなでこね

「モニターフォローハウス」

うつぜえ！－もつダメだ。殺す！

「やめなレンホウ。無駄に体力使うよっ。」

「エリに止められた。まあそうかもしかねないから休んで
はやて

「なにそれ？」

俺は驚いているクローマーに聞く。すると

そうだつたのか・・・?知らなかつた。

男に煙られまいと無表情で考えていた。その時！

悲鳴が闇に轟く。竜……クリムゾンに襲われたのだが!!俺たち
は急いで山を登る。

「能力変換 身体強化
「能力変換 身体強化
ブルー・レスト」

俺たちは魔導を自分にかけ山を登つてゐる。最近知つたことだがガイルも魔導が使えるらしい。子供は集中に時間がかかるから使いづ

らこらしいからあまり使わないとガイルは言っている。

「たく、なんだって山の入り口で休んでたんだ！」

軽くグチをこぼす。

「いいから急ぐ！」

プエルに怒られた。。。

人が多くなってきた。もつそろそろつくるのだろうか？

そんなことを考えていたら上から岩が降ってきた。

「くつ。変換 衝撃 トリス！」

魔導を変え岩に衝撃を当て粉碎した。しかしそまだ岩は降つてくる。

「埒があかんぞ？」

「確かに・・・。ここからは歩いていい。岩を避けながら
プエルが言つ。そういえば 情報屋 アーバスに聞いたことがある。
山には 岩降地帯 といって岩が無数に降る場所があると。
そんなことは関係ない。今は一刻も早くクリムゾンのもとへ行こう。
そう思い俺たちは岩降地帯を走り抜ける。

第1-8話・討伐（後書き）

今作者は夏休みの宿題におわれています・・・

第19話・運命

歌が聞こえる・・・

月の光がわたしを照らす・・・

闇夜の風がわたしを切る・・・

それはひどく悲しい運命の唄・・・

人の命はとてももろい。あなたの命もまたしかり・・・

あなたに会いたい。あいたい。アイタイ・・・

「―――。レンホウ！」

エルの声に驚く。

「！なんだ？」

「なんだではあるまい。ぼーっとして！」

ガイルに怒られ、走り出す。

「今、【歌】聞こえなかつたか？」

確かに聞こえた歌・・・。だが不思議に思い一人に聞く。

「歌？そんなものは聞こえておらんぞ？」

「私も聞こえなかつたなー。魔族は人間より感覚が鋭いけど・・・

嘘だ・・・。あんなにはつきり子供のようなあどけない声が聞こえたのに。

歌が頭の中に残っている。ひどく悲しい運命の唄。なにかを振り切るように頭を横に振り走る。

だいぶ走つてようやく着いた場所は・・・惨劇だつた。Aランクの人間が焼け焦げ、切り刻まれ、魂無き肉塊に姿を変えている。土の色は黄土から赤へ・・・。

竜・・・クリムゾンの大きさは人間と同程度。だが、牙・爪そして体は赤。命を喰らつた者の証が偽りなく体にまとわりついている。

「これがクリムゾン・・・」

「先に言つておくがこいつに勝つことはまず不可能と思え俺が竜を見ながら呟くと、ガイルが言つ。

「なんでだ？」

「この竜は過去、伝説とまで謳われたクローマー3人が挑んでも付けることが出来た傷はかすり傷だけ・・・」

なら何故こんな依頼をクローマーに?

考えているとガイルが口を開く。

「こいつは・・・竜人じやからな。殺しても魔界に戻るだけ。だが、伝説のクローマーでさえ傷はつけられない。つまり、倒せないといふこと。こいつは天災の一つと云われているほどじや」

早い話がおっぱらえと言うことか。

考えながら深くため息をつく。

「いくよ!一人とも!..」

ブルエルはそう言うと後ろへ下がり援護に回る。俺が曲刀・ガイルは大剣をだし、クリムゾンに向かつて走り出す。まだ生きている他のクローマーは援護に加わる者もいれば逃げ出す者もいた。

曲刀を振り降ろし切りかかると何やら声が聞こえる。

(命つてなに?大切?)

その声はあの歌の声と同じ声。違和感を感じながらも曲刀を翼に振り降ろす。

ガキンツ!!

なにかの金属を切つたような感触。翼に振り降ろした曲刀は宙を舞い山の岩肌に刺さる。クリムゾンを見たら「ゴミかなにかを払つよう

に翼を羽ばたかせている。

「バカが。奴の鱗は並ではないほどの硬度をもつているー。つかつに切れば弾かれるぞ！」

弾かれた後に言われても困るものがある。

「なら・・・トリス！！」

衝撃を放つがびくともしない。不思議に思つたが俺以外誰も動いていない・・・

「なんで動かない！ガイル！プエル！」

「レンホウはこの声聞こえないの？動くじろじやないよ・・・泣きそうな声でプエルは話す。だが、その声すら聞き取りづらい。

「声？」

動きを止め耳をします・・・。微かに聞こえてくるのは話し声。

(待つてよ！母様)

(レンホウ。早く来なさい)

(母様！僕の腕が・・・)

(大丈夫ですよレンホウ・・・。ほらこれで)

なんだこれ？【レンホウ】？【母様】？これって俺の記憶？いや違う！親が居るときはまだ俺は【烈火】だ。

考えていると頭があかしくなってきそうだ・・・。

「今はこいつの討伐に集中しろよ！一人！」

大声で叫ぶと二人は思い出したようにクリムゾンを見る。

「そうだつたね！」

能力変換 水 ブルー・レスト」

プエルが中空に水の玉をだしそれを弾丸のような速さで撃ち出す。

そしてそれに合わせるように

「死閃煉獄衝！」

ガイルがかまいたちを放つ。俺は岩に刺さつた刀を取りに行つてゐる真つ最中。

クリムゾンは黒い火球を吐き出し風をかき消し水を一瞬で気化させた。

「これが獄炎・・・」

ペエルは驚いたように咳くと右に跳んだ。左に跳んだら山を落ちることになっていた。

ガイルも右に飛び獄炎とやらを避けていた。俺はようやく曲刀を抜くことが出来た。意外に深く刺さつてたな・・・。

竜は降りてくる俺に合わせてくるように獄炎を撃つてきた。

「レンホウ！！！」

二人の声が聞こえる。こんな所では死にたくない。

「トリス！！！」

下に最大限の衝撃を放ち体を浮かせ獄炎を避ける。当たらなかつたそれは青空に消えていった。

「ブルー・レスト！」

「・・・能力変換 雷 ダスクドル！」

ペエルはクリムゾンの足元の土を水で沼に変えた。そしてガイルはクリムゾンに雷を当てた。さすがGEIST！ ん？ なんで知ってるのかつて？ 後で説明する。今は大変だから。クリムゾンもこの攻撃には驚いた様子だ。だが、何故か奴は直接的な攻撃はしてこない。

（そこの女・・・）

低い声が辺りに聞こえる。その声の主は紅い竜からだ。

「あたし？」

（おまえ以外に誰がある？ 他の人間共は逃げ出したぞ）

「嘘！？」

周りを見渡すがもう誰もいない。いるのは4人。ん？ 4人？ 3人と1匹？ いや、だけど竜人だから4人か？

「なに百面相しておる？」

「ホントだ。どしたのレンホウ？」

「いや、なんでもない。そつちの話を続けて」

なんとかごまかせた。人数数えで悩んでたらバカといわれる。

（おまえからは魔界の匂いがする・・・）

「あたしは吸血鬼だから」

平前と答えているがこの世界で吸血鬼は災いの元らしい。

（父親は？）

「デュノン・デル・シェルよ」

プエルのフルネームは【プエル・ド・シェル】だ。

（そうか・・・。デュノンの娘か。母親は？）

「さあ？知らないわ」

そういうや討伐しないのか？

少し考えた結果・・・まあ、いいや。といつ結論が出た。

（知りたいのならば・・・）

【夢眠る棚・真実の扉】を開けよ

「なんだそれ？」

話を割って聞く。

（自分で調べよ。余は魔界に帰るとしよう。鱗をやろう。余にあれほど傷を負わせた記念にな。余はもう二度には来るつもりはない。ではな・・・楽しかったぞ）

そう言つとクリムゾンは鱗を一枚落とし、空へと消えた。

プエルを見ると悩んだ顔で考えている。

「どうした？プエル」

「いや、なんでもないよ。さ、ハウスに行って討伐完了の報告をしてこよう」

プエルがいつもより明るいのは不自然だ。

思えばこのときが俺たちの運命を変えた時だったのかもしれない・・・

あなたに会いたい。あいたい。アイタイ。

ひどく悲しい運命の・・・
唄・・・

第20話・別れ（前書き）

更新が送れて申し訳ありません。なにせ宿題が溜まつてますので…。
・。作者は学生です。

第20話・別れ

歌が聞こえる・・・

あなたは生きて わたしは死ぬ・・・

ひどく悲しい運命の唄・・・

あなたは光 わたしは影・・・

あなたとわたしはもう会えない・・・

あなたに会いたい あいたい アイタイ・・・

「夢の棚、夢の棚・・・」

俺は、いや俺たちは今吸血鬼の城の図書室にいる。何故ここにいるのかは数時間前に遡る。

俺たちはハウスに行き100万ギルドを貰った。だが納得いかなかつた。奴・・・クリムゾンは

「もう来ない」

と言つただけだ。そして俺は奴に決定打を打えていいない。

それは置いといて。

家に帰つた後にプエルが

「あのね、クリムゾンが言つてた【夢の棚・真実の扉】なんだけど

たしか城の図書室にあつたと思つんだよね
と言つて俺たちはまたこの城に来た。

「この城の図書室は『図書室』とは名ばかりで記録庫のよつたな部屋だ。

部屋はカビ臭い。だが、本棚が無数にそれも規則正しく並べられていることから図書室と言つている。

「ガイルー。あつたか？夢の棚」

本棚をはさんで向こうにいるガイルに聞く。

「あつたらもう呼んでる。早く見つける！」

意味もなく怒られた。そのとき俺の携帯が鳴つた。誰だ？　と思ひ電話ボタンを押す。

（あ、レンホウ。ちょっと奥の部屋に来て）

プロルからだつた。奥の扉といつのは重要な記録が保管されている部屋だ。ここにあるのは戦争の記録・神話等の本やレポート等が置かれている。

「？　わかつた。スグ行く」

そう言い電話をきる。

「悪いガイル。俺、奥の扉に行つてくる。プロルに呼ばれてぞ」

そう言つて俺は奥の部屋に行つた。

奥の部屋は図書室よりは狭い。というより普通の部屋だ。部屋の真ん中には長テーブルが一個。外が見えないよつに本棚が並べられている。テーブルにはプロルが座つている。

「来てやつたぞ」

少し不機嫌そうにプロルに話す。

「ありがと。あのさ、夢の棚なんだけど・・・」

プロルは言いづらそうに口を開く。

「なんだよ？　もしかしてここには無いつてか？」

「・・・うん。ないんだ・・・」

案の定。思つていたとおりの言葉が返つてきた。俺は額に手を当

てため息をはく。

「正確にはここから行ける【魔界】にあるんだ」
意味がわからなくなってきた。魔界？ ジャあ、プエルは魔界に行くってことか？

頭の情報処理がオーバーヒートをおこしそうだった。なんとか整理できた頭を軽くはたきプエルに聞いた。

「じゃあ、行く準備をしろって事だな。じゃガイルにこのことを言つてくるぞ」

「待つて！ ガイルに言わないで」
プエルが俺の手を取り止める。

「ガイルだけ留守番か？ それは可愛そ ！？」

可愛そつだろ？ そう言おうとしたらプエルが腕を引っ張り俺はバランスを崩した。その刹那、プエルが俺の唇を奪つた。

短い接吻が終わりプエルが口を開いた。

「これはあたしの問題なの。あたしだけで魔界に行く
強気な口調だがその田には涙がみえる。

「だけど・・・ ！ ！ ！」

引き留めようとしたが腹に衝撃をくらい俺は意識を失つた。
「ごめんねレンホウ・・・。あたしは魔族だから・・・」

悲しげな言葉を言い残し彼女は消えた。そして、俺が彼女に会つことはもうなかつた・・・。

もつ会えないのだから・・・

頭の中に歌が聞こえる・・・

田を覚まし周りを見るとプエルはもういなかつた。

「くそ……あのバカ！！」

言いようのない怒りの中俺は部屋を後にする。

図書室に戻りあたりを見回すがガイルがいない。不思議に思い大声で呼びかける。

「ガイル！帰るぞ。ガイルー！！」

叫んでも返事は返つてこない。ふと一つのテーブルを見ると手紙が置いてあつた。

「なんだこれ？手紙か？」

その手紙はガイルからのものだつた。俺はまさかと思いながら手紙を読んだ。

『レンホウへ

お主がこれを読んでいるということは魔界には行けなかつたのじやろう？プエルは最初から1人で全てを終わらせるようだつたから。わしはプエルと同じように魔界へ行く。魔界は魔族ではないと行けないがこの前知つたことでわしも魔族じや。正確には【獣人族】という部類に入るらしい。だから背が伸びず……まあそんなことはどうでもいい。というわけでわしとプエルは魔界に行く。心配するな。死ぬことはない。ではまた会えることを祈りうへ

最後にごめんなさい……。

軽い達筆だつたが読むことが出来た。

「なにがごめんだよ……。なにが獣人族だよ。何が祈りうだよ……！」

静かに怒りがあふれてくる。ガイルやプエルにではなく魔界に行けない自分自身に。

「ふう……仕方ない。とりあえずこの城から出るか。もういい

に来ることもないだろう。「

俺はもと来た道を1人で戻った。もう戻らない仲間のことを思いながら……

町に戻った俺はとりあえずクロームハウスに行つた。

「仕事を受けたいんだけど……。N〇・8403 Aクラス 蓮崩だ」

受付の男に仕事を要請した。

「竜討伐がありますが……どうしますか?」

「受けける」

「承りました。この依頼はハウスからの依頼です。すぐにトルナ草原に行つて結構です」

受付の男が言つた【ハウスからの依頼】とは一般人からの依頼ではなくクローム内の依頼。つまり、クロームが依頼人というわけだ。

トルナ草原についたがんじんの竜が見つからない。あたりを見回しても気配を探しても竜の気配は見つからない。誰か別のクローマーに倒されたか?

「グルルルル……」

そんなことを思つていたら竜のうめき声が上から聞こえた。俺はすぐバツクステップを踏み竜との間合いを開ける。

竜の大きさは推定50mこの大きさなら上位の竜だ。もちろん最上位竜はクリムゾンだが。

すかさず俺は剣を魔導刀（長刀）に変化させ竜に切りかかる。

「能力変換 破壊 トリス。《帶びろ》」

破壊の力を刀に帶びさせる。がその間に竜が火球を吐き出してきた。俺は反応が遅れ火球は左腕に直撃した。いつもは楽に避けられるのだが一人がいなくなつたショックから戦闘にも支障が出てきているのだ。

「くそ……！この野郎！！」

足を切りつけ魔導を発動させ右前足を破壊する。破壊された部分から血がふきだしている。

「……」

俺は頭の中になにか違和感を感じ攻撃を止める。聞こえてくるのはトロスとは違う声。

（本性をさらけ出せばいいのに…… こんな竜簡単に殺せるでしょう？）

頭を横に振り竜を前に見据える。だが声は止むことはない。

（ほら……醜い本性をさらけだしな？ 楽になるよ）

「うせえ……」

竜の攻撃を避けながら会話を続ける。

（そうか仕方ないねえ…… 手伝つてあげるよ……）

その瞬間俺の意識が消えた……

また詩を書きました。

読んでくれたら嬉しいです

さあ殺せ

怒りの刃で 憤しみの刃で 殺意の刃で

愛しき者を 憤むべき者を 親しき者を

愛する者の喉元を 憤むべき者の身体を 親しき者の心臓を

すべてを壊し 独りになれ

本能のままに殺戮に身をゆだねる

身体が軽い 頭がすつきりする

解放される抑制力 命を奪つ快樂 血を浴びる清涼感

さあ殺せ

愛しき者を 憎むべき者を 親しき者を

誰よりも多く 誰よりも残酷に

命を喰らえ 魂を奪え 身体を切り刻め

本能のままに人を 生き物を

殺せ

赤き血を 形なき魂を

奪い取れ

身体が動く 頭が叫ぶ

命を刈り取れ 魂を奪え 身体を切り刻めと

殺せ じるせ ロロセ・・・

血を啜り 内臓を喰い 命をむしりとれ

新しき 死の世界へと連れていく

おれは死の使い 死神 地獄の使者

生きる者を殺し 死への世界へ連れていく

さあ殺せ

愛しき者を 憎むべき者を 親しき者を

恨むなら 今ここにいる 自分を恨め

運命のままに 死んでゆけ

さあお前も・・・

一人 また一人 命を喰われ 死んでゆく・・・

第22話・疑惑（前書き）

グロい部分があるので苦手な人は読まないことをオススメします

「くそ・・・！なんなんだこいつは！」

ギルドステム・ファルクは肩で息をしながら田の前にいる【化け物】を見ている。

化け物の容姿は人間。だが体色はレーヴェルシティの人間を多く殺しすぎて赤に染まっている。だが瞳の色は黒。

・・・レンホウだ。

だがいつも彼とは様子が違う。目は虚ろ、長刀には魔導が通っている。言葉遣いは子供のようだ。

「クスクス・・・死んで おじさん」

蓮崩はギルドに飛びつき刀を振り降ろす。ギルドは持っていた自分の愛武器・【鬼爪】を装着し刀を防ぐ。振りを止められたそれに通つてた魔導は 衝撃。ギルドは後ろに吹き飛ばされた。

「逃がさないよ クスクス・・・」

すぐに蓮崩は足の裏に衝撃を放ち反動で飛んできた。

ギルドは避けきれず刀に斬られ中から衝撃を放たれ中の臓物をまき散らし絶命した・・・。

「ハハ・・・ハハハハハハハハハハ」

狂つたように笑う蓮崩の周囲には体の原型をとどめていない肉塊が転がっている。目には光が無くただ赤とは正反対の青空を見つめている者もいれば蓮崩を憎むように見ている顔もある。

「！！！ つつ！！」

強烈な頭痛がおき俺は意識をとりもどした。

「ここって・・・！！！ ギルドステム・・・」

愕然とした。両膝を折り血溜まりの地面についた。

ピチャリと音が鳴り我にかえり、声に出し頭の情報を整理する。

「城から帰つて、ハウスに行って依頼受けて草原行って・・・」

それ以降の記憶がない。【欠落】ではなく【無い】のだ。だが【無い】部分は頭に響く声が説明する。

（そこからは僕が出てきて竜を殺したんだよ？ だけど、殺したりないから町に来て全員殺したよ 楽しかったあ・・・。最後の人ガ一番強かつたなあ。これが君の本当の性格でしょ？）

違う

（君は人を殺したくて殺したくてたまらないんだ。だから僕が手伝つてあげたんだよ）

違う 違う ちがう ちがう チガウ チガウ

（どう？ 血の臭い。人を斬った感触。血の暖かさ）

実際には俺が斬ったわけではないが斬った感触は体に残っている。刀が骨に食い込みそれを削った感触。骨すらも切るほどの威力をもつて振り降ろした力。すべてが・・・

絶望した・・・。人を殺した。人を斬った。

「ハハハ・・・」

乾いた笑いをこぼしふらつきながら家に戻る。

「ただいま・・・」

「お帰り どうだつた？ 依頼」

そういう会話がつい昨日まであったのに。もうその声は聞こえない。

風呂に行き体についた血を洗い流す。血は落ちるが罪は洗い流せない。鼻を衝く鉄のにおいがする。

「くそ野郎・・・」

シャワーを浴びながら呟く。

「！ そうだ！ 【アーバス】。あいつの家は離れているから大丈夫のはずだ」

俺はシャワーを止め服を着替え、情報屋の家【アーバスの館】に走った。走るといつても道を走れば死人を踏みつけて歩くことになるので屋根の上を魔導をかけて跳んだ。

館に着いた俺は急いで中に入りアーバスの安否を確認する。

だが、いややはりと言つべきだろう。中はひどく荒らされていた。

そして、残骸の上には命なき老婆が静かに寝ている。

そんなとき頭から声が聞こえた。

（あれ？ こんなところに家があつたんだ。知らなかつた）

「おまえが殺したんじゃないのか？」

（僕は町外れまでは来てないよ。こんな家知らなかつたもん）

声の主は本当に何も知らないらしい。ならなぜアーバスが死んでいる？ 不思議に思いアーバスの死体に近づく。

変わつた様子はない。が切り傷が嫌でも目立つ。まるでメスで切られたような傷が。

「メス？ メスを使うのは医者だよな？ もしかして・・・」

考えを巡らせていると後ろから声が聞こえる。

「そのもしかしてですよ。レンホウ君」

第23話・命（前書き）

この「じぶんは」「ラックな内容でしかありませんが呼んでくれたら嬉しいです。

「くつ！」

体を捻り、飛んでくる無数のメスや注射器を避ける。

「ハハハ！ 楽しいなあレンホウ君！」

だいぶ前にプエルを診てくれた医者ゼシルド・クロスと俺は今戦っている。事の発端はついさっき。

「そのもしかしてですよレンホウ君」

アーバスの死体を見ている俺の後ろから声が聞こえた。

「その声、ゼシル・・・」

振り向こうとしたが首、それも頸動脈あたりにメスが当たり振り向くのを止めた。

「そう。ゼシルド・クロスです」

何か様子が違う。貴族のような話し方だ。 そう思つていたら後ろにいるゼシルドは口を開いた。

「あなたのおかげで町の人間が殆ど死にました。 ありがとうございます。私の国が建ちましたら右腕になることを許しましょう」

「それはどうも。歓迎いたみります。なんて言うと思つたか？町の人間を皆殺しにした後、国をたちあげるだと？」

静かに怒りが沸き上がつてくる。我慢できるのはもはや数分だろう。

「ええ。確かに私は国を造りますよ？私の国を」

我慢の限界だ。 そう思い俺はゼシルドを外へ蹴り飛ばした。そして、俺もすぐに後を追う。

すさまじい轟音と共にアーバスの館が崩れた。

「能力変換 召還 トリス！」

合剣を出し曲刀に変化させる。そして奴に切りかかるがゼシルド

はメスを指の間に挟め投げつけてきた。

とまあこんな感じだ。

「能力変換 雷 トリス」

魔導を雷に変化させ飛んでくるメスに当て止めようとする。がゼシルドは

「無駄ですよ。変換 操作 アイラ！」

ゼシルドが言霊を発するとメスはまるで生き物のような動きをしながら俺に近づいてくる。

「能力へんか

「アイラ！」

魔導を変化する間もなくスピードを上げたメスが喉に突き刺さる。それ以外のメスは曲刀で弾いた。

「ガホッ！・・ろ・・・どつ・・つて」

喉を刺され声が出せなくなつた。このせいで戦力が下がるのは言うまでもないだろつ。

「これで魔導が使えませんね。さあ私を足蹴にした罪は重いですよ！」

激痛に耐え喉に刺さつてゐるメスを引き抜き体勢を整える。もつ声は出ずヒューーヒューーという音しかでない。

「変換 光 アイラ！」

周りの光が弱まりゼシルドの周りに集まつていく。そして次の瞬間。

光が俺の腕をすり抜けた。だが所詮は光。物質だから当たつても痛くはない。

「知つているのですよレンホウ君。君は魔族だ。だから光は極端に嫌いなはず」

何を言つてゐるんだ？俺は魔族ではない。大体、魔族だつたら俺はおまえをすぐに殺す！

そう言いたいが喉を切り裂かれているために言えない。

「さあ行きますよ！」

『我に託されしは命を育む花。等しく光を放ち我が敵を浄化せよ』
彼の後ろに【巨大な花（薔薇だろうか？）】が出現した。そして花びらが開き中から光が飛び出してくる。

奇跡的な反射力で一つを避けるが無数の光は俺を襲い触れた直後に爆発がおきた。俺は全方向の光の餌食になった。

（痛つてえな・・・間違いなく死確実だな）

そんなことを考えていても光は容赦なく俺を襲う。実際普通の人間なら死ぬだろう。【普通】の人間なら・・・。

「ハツハツハ！愉快だ【疾風のレンホウ】と言われた男をこの私が殺した！ハーツハツハ！」

相変わらず馬鹿笑いを繰り返すゼシルド。だが蓮崩にはその笑い声は耳に届いていない・・・

ゼシルドは近くに歩み寄り、焼けた髪を掴み頭を上げる。もはやその目には光がなくただただ屍になつた少年がいた。名を蓮崩、年は14、異世界の少年、クローマー。

「ハーツハツハツハツハ！」

ただ笑う男に殺された悲しい少年。だが少年は町一つの人間を殺した。そして死ぬことでその罪は消えた。悲しき少年よ。果て無き夢を見よ・・・

ドクン・・・

ドクン・・・

ドクン・・・

第23話・命（後書き）

『小説家になろう～秘密基地～』にイラストが載っています。
『ひい』様と『更妙ありさ』様が描いてくださいました。本当に有
難う御座います！！

「うー、どうだ？」

周りを見渡しても何もない真っ白な場所。だが足場はある。俺はゆっくりと歩き出す。

「ここって死の世界か？」

軽く笑いながら呟く。死の世界なら嬉しい。俺は人を殺しそぎた。・。・。

「人を殺したのは君じゃなくて僕だ」

奥から声が聞こえる。その声には聞き覚えがあった。以前頭に聞こえた声。急に不安になり声のもとに走った。

「やあ。こいつして会うのは初めてだね」

「よ。俺は二回目だなあ 蓮崩」

そこにいたのは俺の精霊【トリス】、そして身体を乗つ取り町中の人間を殺した奴が立っていた。姿形は俺と同じ。

「あれ？ 驚かないんだ」

「今更驚いてもな。前にトリスに会つたときは驚いたけど」

「そりや驚くだろ？ ぜ？ いきなり自分が目の前にいるんだからよ」

会話をしたことで不安や恐怖が消えた。俺は一人に聞く。

「ここってどこなんだ？ 死んだ後の世界とかか？」

「ちょっと違う。生と死の狭間？ かな」

「なんで疑問なんだよ！ いいか蓮崩。生き返りたきや俺たちを倒せ。

違うんなら俺たちが殺す。まあ選べ」

なんで死んだ後なのに殺されなくちゃいけねえんだよ！ 軽いツ

ツコミを心の中でいれ考える。

（このまま死んでもいいけどな・・・。聖、悲しむよな。ん？ なんであいつなんだ？？ ま、死ぬのは、ゴメンだなー）

頭を整理し出した答えは【生き返る】こと。

「とりあえずは生き返る！ それ以外は後で考えるさ」

「後悔しない？」

声の主（名前がないので）は確認してきた。

「ああ」

「じゃあ、イクぜえ！」

一足先にトリスが走ってきた。狭間の世界じゃ魔導は使えないだろ？ そう思い拳を握り近接戦に備える。

「さあ殺してやるぜえ！」

勢いをつけた拳を軽く避け跳んできたトリスの懷に潜り込み腹に膝蹴りを当てる。

案の定。地面に足をつけていないため上に飛ばされるトリス。追い打ちをかけようと跳ぶが、

「僕を忘れないでほしいね。やああーー！」

声の主が飛び蹴りをしてくる。俺は体を捻りなんとか防御したが足場がないため後ろに跳ばされる。

そこを待ちかまえていたかのように上にいるトリスが両手を握りハンマーのように振り降ろす。俺は避けられず下に叩きつけられた。

「二人相手はキツイな・・・」

「俺たちを取り込まねえとヤベェぜ？元の世界に戻ったとき

「取り込む？どういうことだ？」

不思議に思いトリスに聞き返す。

「いいか？精霊は体に宿ってる。わかるか？つまりお前はこっちの世界に来た時点で精霊を宿した。だから元の世界に戻っても俺は消えねえ」

「じゃあ、おまえは消えるのか？」

俺は声の主に話を振る。

「僕を消すのは君の気持ち次第だよ？僕は君の本性なんだから。と言つても人間の本性は実際自分も解つてない人が多いからね

声の主はやれやれと言つた感じで話す。

「話を戻すぜ？おまえが帰れても俺は残る。そこまで話したよな？」

俺は軽く頷く。

「そつなるとお前はたまに意識がなくなり俺がでてきて人を殺す可能性がある。あくまで可能性だからな。だから一度死んで狭間の世界に来て本人同士が直接戦い、俺を負かして取り込めば解決ということだ。わかつたか？わかつたなら続きた！」

長い説明が終わり戦闘は再開した。とりあえず俺はトリスを倒さなきやいけないんだな。

「やつてやる……」

すさまじいほどの鬪気を両手に溜める。そしてトリスに向かって走り出す。

「なんだあ？」

「喰らえ！ガイル直伝【闘碎狼牙】（とうせうりゅうが）……」
両手に集めた鬪気をトリスの腹めがけて打ち込む。この技は内蔵にも多少のダメージを負わせる技。つまり多対一の状況では使える技らしい。

「ゲッホッ！！油断したぜ……！！！」

トリスの動きが急激に遅くなつた。当たり前だろ？。どんなに硬い鱗をもつた竜でも内蔵までは硬くはない。つまり内蔵にダメージを追わされでは早く動くこともできない。

「くそつ！やあ！はつ！」

声の主は不規則な早さの攻撃を繰り出してくるがもはや一対一はするだけ無駄だ。俺はすべてを捌き足払いを当て相手を「転ばせる。「勝負あつたな」

仰向けに倒れた声の主の首に拳を寸止めし勝負は終わった。

「まさか・・・俺たちに勝つちまうとはな。ゲホッ」

トリスは少し残念な顔をして咳込んでいた。少しやりすぎたか？

「おめでとう。レンホウ生き返れるよ」

微笑みながら声の主は話しかけてくる。よくよく思えばこいつも人間なんだよな。ていうか俺だし。

「ま、力には溺れんなよ！」

トリスがそう言つと一人は光になつて俺の中に入った。

「ま、決意は固まつたな。帰るか」

俺は光になり消えた。だがふと思つたことがあつた。

「そういうやなんで死んだのに生き返れるんだ?」

その疑問を残し俺はゼシルドしかいないレー・ヴェルシティへと戻つた。

「ん……」

狭間の世界から戻り俺は目を覚ました。正確には生き返った。
「生き返れたな……！－－！イデデデ－－！」

動こうとしたら体が動かない。そして強烈な痛みが体中に走った。
死後硬直だ。

「こんなに痛てえもんなのか……」

「バキバキと骨がなる音が体に響く。正直かなり痛い。」

「さて、と。ゼシルドを探すか」
体がほぐれたところでゼシルドを探すこととした。周りを見渡す
が彼は見つからない。目を瞑り気配を辿ると、だいぶ離れた場所に
いることがわかる。

「大通りか。……よし！」

足元に置いてあつた曲刀を手に取り俺は大通りに走った。

大通りではゼシルドが死体を漁っていた。

「なるほど……これはこうなつていたのか」

「あんた医者だろ？ なんで体の構造がわからないんだ？」

原型がある死体を解剖している彼に問い合わせた。傷や喉は生き返
る際に治っていた。

「なぜ君が！？ わたしが葬つたはずなのに」

「お生憎。死んでないんだなー実は。あれはダミーさ。あんたに死
んだと思わせておくためのな」

俺はダミーと言っているがあれは間違いなく【俺 本人】だ。集
中力を消すことができれば魔導も弱くなるだろうと思つてのこと。

「そうですか……。ならばまた、今度こそ殺します！」

『我に託されしは

「ふつ……」

詠唱を言い終える前に俺は片手を前に強く押しだし衝撃を放った。手から放たれたそれは彼の一歩前の道を削った。

「なるほどね。取り込めば【無】に関係するものを無条件に出せるのか……」

トリスと本性を取り込んだことで体が軽くなり、力すべてが強くなつた。

「バカな！！！【取り込み】は正式な儀式がある。それを無視して取り込みを行つて成功の確率は……3%なのだぞ」ゼシルドは驚きの表情のまま動かない。それを好機に身体強化を施し彼の背後に回る。

「じゃあな。ゼシルド・クロス。プエルを診てくれて……ありがとな」

最後に感謝をして、俺は彼の命を奪つた……。

「自我があつての殺しは初めてだな」

そう。俺は実際、意識がない時に人を殺していた。だから自分で殺すのは初だ。だが、後悔も絶望もない。これが【生きる】ということだから。

「死体を片づけないとな。よつと」

クロームハウスの屋根に乗り俺は詠唱を始めた。

「『我が命に従いて現れたるは闇を司りし者。命なき者を深き地へと墜とせ』」

詠唱が終わり影という影から無数の悪魔（体長30cm全身黒で槍を持）が表れ死体を吸い取り一人吸い取つたら地面に消えた。そして染み着いた血までもを吸い取り悪魔は消え、町は急にガランとなつた。

「とりあえず家に帰るか……」

そう言い俺は家へ帰つた。

玄関先で異変に気づいた。家中が光つていて。変だと思い急い

で家に入る。そして目に入ったのは……青い短髪、血のよつた瞳、
プエル。

そして緑の髪に瞳。だが頭に耳が付き、目は狼のようだ。さらにも
尻尾まで生えている。一瞬目を疑つたがガイルだった。

「ただいま レンホウ」

「うむ。帰つてきたぞ」

明るく返事をするプエルと爺さん口調で話すガイル。
「よ。おかえり。こつちは大変だつたけど……」

「ごめん。町はまた新しく作り替えよつ。今は……」

「「ただいま」」

なぜ知つているのだろう？町の人間が死んだ（殺された）こと。
まあ、今はとりあえず……。

おかえり。

『一難去つてまた一難』

その言葉は聞いたことがあるでしょう。運命とは実に珍しいものです。

俺はプエルの母親のことを静かに聞いていた。ガイルはとても綺麗だったと言っていた。だが、俺は実際見たことがないので聞いてもわからなかつた。

『百聞は一見にしかず』とはこの事を言つのだひつ。

プエルの話が終わり俺たちは外に出て体内の空気を入れ替えた。
「ま、母親に会えたんだから良かつたよな？」

「そうじやな」

「そういや、なんでお前はそんな格好なんだ?不思議で仕方がねえんだが……」

二人が帰つてきたときから不思議でしかたなかつた。頭には犬の
ような耳、瞳は狼のような目、そして尻には尻尾。

「魔界に戻ると強制的に元の姿に戻るらしいのじや。しかし戻つた
はいいが今度は人間の姿に戻れなくなつてしまつての……」

「いや……。答えになつてねえ!お前は【獣人族】なんだろ?獣人
族つてなんなんだ?」

「獣人族は種類が多すぎて一概にこれとは言えないんじやよ」

ガイルの説明がやけに懐かしい感じがする。

そんな意味もないことを話をしていたらプエルが口を開いた。

「ねえ、この町にはもう私たちしかいないんだよね?」

おもむろにプエルが話してきたことは不思議でしかたなかつた。

「そのはずだけど……。なんでだ?」

「だつて前にいるじゃない？人が」

俺とガイルは前を向いた。さつきまではプエルの方を向いていたために前を見ていなかつた。

「あれは誰じや？」

前には紳士風の老人がいる。右手には杖を持つている。

「初めまして。ガイル様、プエル様。そして蓮崩様」

紳士風の老人は俺たちの名前を呼び微笑んだ。なぜかその笑みには違和感を感じる。

俺たちはすぐに戦闘体勢に入った。

「拳を下ろしてください。貴方がたと戦うつもりはございません」

「じゃあ、あんたの体から出てる殺氣はなんだ？」

俺は問いかけた。事実、何の訓練もしていない人間は卒倒するくらいの殺氣だ。

「ああ。それは……」

男が何かを言おうとした瞬間、体が動かなくなつた。それは他の二人も同じだつた。

「無傷で連れてこいとの命令ですので」

奴の殺気が急激に上がつた。呼吸ができそうにない。いや、呼吸をすることですら隙を見せるようだつた。体の硬直を氣力で解き俺たちは後ろへと逃げた。

「逃がしませんよ。特に蓮崩様は」

「なんなのあいつ！？」

「わしが知るかレンホウ！お主は？」

「知らねえよ。第一知つてたらお前等に言うだろ！」

かなりのスピードで逃げながら会話しているが実際は余裕がなかつた。すぐ後を奴が追ってきた。

「仕方ありませんね……。実力行使でいきますよ！」

そう言つた瞬間、奴は一步で目の前に来た。

「なつ……！」

「すみませんが任務なのでね。はあ！……」
奴は杖を俺の頭に突きつけ衝撃を放ってきた。もちろん俺は避け
きれず直撃した。

「レンホウ！！」

プエルの声が聞こえる。俺は頭を軸に中空を縦に1回転した。な
んとか着地したが脳を揺らされたためひどい吐き気におわれた。

「オエエー！！！ゲホッ！！ゴホッ！」

かなり胃液を吐き俺は意識が無くなつた。

第27話・帰還（前書き）

ようやく最初の頃からの話が繋がりそうです。
読んでくれた皆さんには感謝しています。

「……ウ。……ホウ。レンホウ！」

誰かに呼ばれ目が覚めた。ついでに言えば気分は最悪だ。両手は後ろで縛られ、足はあぐらをかかせられた状態で縛られ身動きがとれなくなっていた。

「レンホウ起きた？ 大丈夫？」

「頭がすっげえフラフラする。多分まだ脳が揺れてる……」
俺を起こしたのはプエルだった。プエルも同じように縛られていた。そして、奥にいたガイルも。

「それにしても此処はどこじゃ？ 空気の匂いがいつもとは違う。魔界の空気とも違うようじゃし……」

「うん。ホント。なんか、自然がないような匂い」

二人は不思議そうに周りを見ているが俺は頭ではすでにわかつていた。

「ここ【日本】だ」

「二ホン？ それって……」

「ああ。俺がいた国だ。懐かしいなー」

ようやく帰つてこれた。そう感じたのも束の間。奥の扉からさつきの老人が歩いてきた。

「お田覚めですかな？ 蓮崩様」

（見りやわかるだろ。この拉致野郎）

小さく咳き奴を見た。ところが奴は目の前にはいなく、背後にいた。

「君たちからはどんな物が出来るのでしょうか。楽しみです」

男はそう言うと縛られている俺たちを解放した。そのとき逃げるという考えは思い浮かばなかつた。

「ねえ。あなたの名前を教えてくれない？」

そう聞いたのはプエルだつた。いつになく力強い瞳が老人に突き

刺さる。

「そうでしたね。私の名はキヨウリム・ネルスです。以後お見知り置きを」

（知る必要はないがの……）

ガイルが呟いた。本人は聞こえないように呟いたらしいがしつかり奴……キヨウリムに聞かれ睨まれていた。

「名前ついでに教えてくれキヨウリム。なんで俺たちは日本にいる？そもそもここは日本か？いや、まず何故俺たちをさらう？それになんのメリットがある？」

矢継ぎ早に質問する俺にキヨウリムは少し慌てて

「ちょ、ちょっと待つて下さい。質問が多すぎます。まず一つお答しましょ。『ここは日本か？』ええ。ここは正真正銘あなたのいた世界【日本】です」

何故？驚きよりも疑問が先に出た。俺は感情を消したよつな声で聞き返す。

「どうやってこっちに来れた！」

「どうしてだと想いますか？」

「質問に質問で返すな！答えろ……。答えなければ……」

「答えなければ？どうします？私を殺しますか？いや、『殺せますか？』？」

いちいち癪にさわる言ひ方をしてくるキヨウリム。だが実際俺は奴を殺すことが出来ない。少なくとも『今』はまだ……。

「まあ。いいでしょ。まあ、こちらへどうぞ」

そう言われて俺たちは田の前には壁しかない場所に集まつた。

「ここは壁しかないが？」

「これは【魔導の壁】です。普通の人には只の壁ですが『我々』のように魔導が使える者にとつてはまやかしの壁です。まあ」

言われるがままに壁に向かつて歩き出す。ぶつかると感じた刹那、【それ】はすりぬけ田の前にはこの世の物とは思えない。いや、思いたくない光景が目に入り込んだ。

「どうしたの？レンホ……。イヤアアアアアア！……！」
「ヘル！どうしたのじや！？…………な」

この後、俺たちはなんとか逃げきり俺の家へと向かった。

第27話・帰還（後書き）

この「」は新しい小説を考えています。
もし投稿したら読んでくれたら感激です。いつになるかわかりませ
んが……

第28話・家族（前書き）

久しぶりに聖が出てきます。

「はあ、はあ……」

かなり走り、疲れきった体を休め息をととのえる。

「さつきの【あれ】はなんじや？」

ガイルは息切れをせず俺に聞いてきた。【あれ】とは壁の向こう側の【人体実験場】だった。

そこでは魔導を習得した人を拘束そのまま不思議な機械に生きたまま入れ出口から出てくるのは一つ一つ違う形状の武器。

「まず、【奴等】に捕まれば死ぬな……」

「そうだね。とりあえずは休む家が欲しいな」

「わかった。俺の家に行こう」

そう言い俺は一人を案内した。

「ここだ」

家を指さすと一人は

「まあまあかな」

ふざけんな吸血鬼。自分の家（城）と比較すんな。

「小さいのだな」

この野郎……。悪かつたな小さくて。

軽く家をけなされたが軽く流し家の中に入る。そこで俺は不思議な光景を目の当たりにする。

「あら？ あなたは誰？」

話しかけてきたのは家にいた人。

「……え？」

俺は言葉が出ず家を出た。

「なんで出たの？ ここがレンホウの家なんでしょう？」

「そのはずなんだ……ど」

家の入り口に付いている名字が書いてある掛け札を見たら【高橋】

と書かれていた。

田を擦り見直しても【高橋】。不安になり聖の家に行くことにした。

（聖、いてくれればいいけど）

そう願い俺たちは聖の家の前にいる。ちなみにさつき実験したことだが、こちらの世界でも魔導は使えた。ただし使うと通行人にかなり見られるが……。

それは別にどうでもよく俺はインター ホンを押す。

ピンポーン

久しぶりに聞いた音がとても心地よく思えた。そしてガチャリという音が聞こえ中から現れたのは腰までかかる黒髪。そして見た者を吸い込みそうな漆黒の瞳。その姿は紛れもなく里崎 聖そのものだつた。

「誰ですか？」

聖は呆気にとられたような顔をして俺に問いかけてきた。

「ずいぶんな言い草だな……」

「どなたかわかりませんが取り合えず中へ」

そう言われ俺たちは中へ入った。

玄関に入り少し歩き右にあるリビングに入った。次の瞬間

「蓮崩！！！」

聖が勢い良く飛びついてきた。なんとか受け止めたがバランスが後ろに崩れ倒れた。

「痛つて……」

「あ、ごめん……」

すぐに聖はどけ隣に座つた。

「レンホウ……。その者は恋人か？」

いきなりガイルが質問をしてきた。普通10才では聞かないような質問を。

「違う！…」これは幼なじみだ

「レンホウ……。本当？」

「エルが殺氣を殺し話しかけてくる。はつきり言ってかなり怖い。

「本当…です。はい」

恐怖を隠しなんとか答える。聖は不思議に思つたのか俺に聞いてきた。

「ねえ、あなた達は誰？」

「あたしはエル。エル・ド・シェルよ。吸血鬼だけどね」

紅い眼が真っ直ぐに聖を見る。

「吸血鬼？トランシルバニアにいると云われている？」

「とらんしるばにあ？なにそれ？」

聖は困惑の表情で俺を見ている。

「どういうこと？」

「それは後で説明する。このちのちのちやいのは…」

「ガイル・ジエラルドじゃ」

いつの間にかガイルは人間の姿に戻つていた。

「この子は？」

「それもまとめて説明する。そついえば俺の家が別の家になつてたぞ？」

聖に聞くと別段驚いた様子も見せずに口を開いた。

「そう。あんたがいなくなつてから急にみんながあんたのことを忘れたの。会つたことが無いみたいに」

「どういうことだ？」

「さあ？取り合えずあなた達は私の家族になつたほうが良いと思つの？」

「なんでだ？」

突然の提案に3人は混乱した。

「誰も覚えていないんだから。それに家もないんでしょう？蓮崩は家族もいないんだから久しぶりに【家族】になつて日常を楽しんだら？」

「そ…うだな」

「じゃあ、パールさんとガイル君の名前を変えよひへ・里崎に合ひつようにな」

急に明るくなつた聖は名前を考えていた。このときは知らなかつた。聖の両親が事故に逢い亡くなつっていた事に。

第29話・孤独（前書き）

少しづつ終わりに近付いています。こんな小説を読んでいただき本当に有り難うござります。

「じゃあ、プエルさんは【里崎 鈴】。ガイル君は【里崎 翔太】ね」

3時間かけて名前が決まった。俺はそのままの【里崎 蓮崩】になつた。

「そういえば聖ちゃん」

プエル……いや鈴が口を開いた。

「なに？」

この二人はすっかり打ち解けたらしい。ガイル……翔太は人見知りが激しいのか打ち解けることはない。

「魔導を覚えてみない？ 痛みを伴うけどね」

「ううん……。やつてみようかな？」

「ダメだ！！」

聖には教える必要がない。その気持ちが口を開かせた。

「な・なんで？」

「何でもだ。お前が知る必要がない。下手に覚えてついてきても邪魔だ」

冷たいようだが仕方がない。お前には傷ついてほしくない。

「どうしても覚えたいなら俺と闘え」

「何を言い出すのじや！？ 無理に決まつてある」

ガイルが胸ぐらを掴み俺を怒鳴りつける。

「……わかつた。闘う」

聖は俺を見てはつきりそう言い放つた。

「じゃあ、あそこに行くぞ。あそこなら広いし、誰も来ない」

聖は小さく頷き俺達はある場所へと向かつた。プエルとガイルはあわててついてきていた。

「あたしが勝つたら魔導を教えてもらひよー！」

「ああ……。【勝てたら】な

「これからは誰とも関わらない。なぜかその考えが頭をよぎった。

「待つて！能力変換 愈し ブルー・レスト」

「ブルー・レスト」
ペエルは聖に近づき左足を癒した。元々、聖にあった持病を治してくれた。確かにこのままでは聖が不利だ。

「あ、ありがと」

「どういたしまして。（身体強化もかけておいたから。絶対勝つてね）」

ペエルは小さく呟いた。その声は聖だけに聞こえるほどだった。

「（うん。絶対勝つよ。ありがと）いくよ！蓮崩」

そう言つと聖は飛び込んで来た。ちなみにここは昔、公開処刑場でかなりの広さだ。俺と聖は間合いを結構空けていたにもかかわらずすぐに間合いを消してきた。なぜかこの時俺は冷静だった。

彼女は顔に拳、次は右足で足払い。最後に俺が浮かんだところに蹴りを入れてくる。つもりだった。

俺はすべてを避け後ろに飛び間合いを空けた、がまた間合いを詰められ離れることが出来ない。

「攻撃してこなかつたら勝てないよ！」

「ペエル！」

俺は聖の攻撃を避け、ときには捌きながらペエルを呼んだ。

「な・なに？」

「癒し の準備をしておいてくれ。この勝負はもう、【終わらせる】……

「そう言つて俺は攻撃に移つた。聖の腹に衝撃を当て、吹き飛ばされた彼女をすぐに追いこし背中に衝撃を当てる。

「ぐつ！」

聖を襲う痛みはかなりのものだつ。後ろに跳ばされながら後ろに衝撃を当たられれば内臓にもダメージが届く。

聖は腹を抑え、うずくまつた。本来なら勝負はついている。

「聖。俺は【終わらせる】と言つたんだ。その言葉の意味、わかる

な……？

「嘘でしょ……？ねえ！レン

メリッ！

彼女の骨が悲鳴をあげた。そして彼女自身は白目をむき痙攣している。それを見た二人は聖のもとへと駆け寄った。

「ブルー・レスト！――！」

必死に魔導をかけるブルー。ときよつ、俺を恨めしそうに見るが俺は気にはならなかつた。

「なんで……？」

？

「なんでここまでする必要があるの！？聖ちゃんは幼なじみでしょ？あなたには【いたわり】の気持ちや【可愛そう】といつ心はないの！――？」

ブルーは顔を大粒の涙で濡らしながら問い合わせてきた。

「じゃあ、可愛そだから手加減しろと？手加減してもこいつは諦めない。だから……、だから【絶対的な力】を見せつけたほうがいいんだよ」

俺は冷たく言い放つた。ブルーは聖を癒しながらまた聞いてきた。

「こんなの……、こんなの……レンホウらしくない……！」

「らしくない？はつ！そつか……？俺は俺だ。みんな俺の本性を知らないんだからな……」

もはや俺を縛り付ける物は何もない。俺は不思議と冷静だつた。突然ガイルが俺の胸ぐらを掴み飛びついてきた。もちろん俺は後ろに倒れた。

そして次の瞬間ガイルが拳で頬を殴つた。口の中に血の味が広がる。口内を切つたのだろう。

「お主は……！それでも人間か……？」

「当たり前のことを見くな。魔界に行くことができない俺が人間以外の何に見える？」

掴んでいる腕を払いのけガイルは後ろに跳んだ。俺はゆっくりと

体を持ち上げた。

「わしと戦え！レンホウ。ただし【勝負】ではなく【死合】だ。どちらかが死ぬまでじや！！」

今まで見たことのない眼、強い意志。憎しみの眼ともいえる。「……わかつた」

両手を合わせ中空に曲刀を出し、それを手に取り構えた。

「強くなつたな……。合剣を変えた状態で出せるとは」

ガイルは合剣を大剣に変化させた。

「行くぞ……」

「ああ……」

死合が始まる！

「死閃煉獄衝――」

「トリス――」

衝撃がぶつかり合い二人の真ん中で弾けた。
俺は前に飛び足の裏から衝撃を放ちそこから更に低空に飛び曲刀
をガイルに振り下ろした。

「ふつ――空衝連激――」

だが、ガイルは俺が振り下ろしたそれを大剣の腹で受けそのまま
攻撃に転じた。刀を押し返し上に飛び超重量の大剣で何度も切りか
かってくる。だが、俺はそれをすべて捌き着地した。

「そんなものか? ガイル

「まだまだ。大地脈動」

大剣を地面に叩きつけ直線状に大地が流動する。

「ふつ――」

俺は前に衝撃を放ち、襲つてくる土を吹き飛ばした。

「……こんなものか。もういい。……【殺す】」

身体強化を体にかけ一瞬でガイルの背後をとる。これで終わりだ。
と思ったがガイルの周りが歪み後ろへ飛び退いた。

「おぬし相手にこれは見せたくないな。恨むなよレンホウ」

そう言うと周りの歪みが更に強くなり闇が生まれた。そしてガイ
ルは完全に闇に飲まれた。

「なんだ――?」

闇から出てきたのは四足歩行の動物。だが不可解なのは頭が3つ
あること。そして頭はそれぞれ^{たてがみ}に、炎・雷・氷を纏つている。そ
して【それ】の上にはガイルが乗つている。

「できれば使いたくなかった。この……【ケルベロス】だけは」

そう言つとガイルは飛び降り横腹をポンポンと叩いた。言い忘れ
ていたがこいつはかなりデカイ。

『グヴウウウ…！ガアアアアオオオ…！』

この生き物の対策を考えてる途中にこいつは襲ってきた。突然の事だったがなぜかしつかりと判断がついていた。前足の右爪を避け、続いて左の爪は曲刀の腹で受けた。

「今だ！！死閃煉獄衝」

ケルベロスとの戦闘に集中している俺に向かつてガイルは真空波を放ってきた。

俺はそれを避けずケルベロスの前足に当たるように移動した。

狙い通り。

真空波は見事にケルベロスの足に当たり前足を切り裂いた。切り裂かれたそいつはすさまじい轟音を響かせ倒れた。

「しまつ…

「じゃあな。ガイル。特別に殺さないでやる」

そう言い捨て一瞬で背後に回った俺は首を支点に脳に軽く衝撃を与えた。

ガイルは崩れるように倒れたが襟を掴み止めた。そしてプエルのところに投げつけた。

「頼むぞ。プエル」

「どうするの？これから」

不安の表情を浮かべたままプエルが問いかけてくる。

「あいつらを殺してくる……。それが終わったらまた一緒に暮らすぞ」

。……。
そう言い残し俺は例の場所へ跳んだ。誰にも頼らずたった一人で

第31話・苦戦

3人と別れて数分後、俺は港まで来ていた。

「たしか、4番倉庫だつたな」

俺が捕まっていたのは4番だった。辺りを見回し倉庫を探す。

「これより先はいかせん！」

いつの間にか目の前には外見20代の男が立っていた。

「……誰？」

「名乗る意味はないな。これから死に逝く者にはなーー！」

そう言つと男は持つていた大鎌を横に薙ぎ、炎球を放つてきた。

「な……」

炎をなんとか避け体勢を整える。

「よくかわしたなー。だが、これならどうだーー！」

男は体ごと鎌を回転させ炎球をいくつも放つてくる。

「器物破損の何者でもないなーー！」

避けられるものは避け、無理なものは衝撃を当て相殺した。間合いを詰めようとするがいくつもの炎が行く手を塞ぐ。

「くそ……。（ん？ 気配が増えた？）」

明らかに増えた気配は俺に殺氣を向けている。

「ようやく来たか。遅かつたな」

「悪かつたわね」

男の隣には男よりは少し若い女性が立っていた。片手には弓を携えて。

「あんなのを殺せないなんてね。腕、落ちたんじゃない？……ふつ……！」

そう言つと女はどこから出したのか矢を引き絞り、射ってきた。

「のわつ！ー！」

なんとか後ろへ跳び、避けるが矢は地面に当たるなり弾け風に変わつた。

予想もしない突風が俺を襲い更に後ろへ吹き飛ばす。

吹き飛ばされながらも地面に掌を当て衝撃を撃ち、その反動で体を戻す。

「【炎の大鎌】と【風の「」】か……」

なんとか打開策を考えるが……。

「そらそらそらあ——！」

「まだまだーー！」

炎球と矢が絶え間なく俺を襲うため思考が鈍る。

「ふう——」

静かにしかし大きく息を吐き戦闘の型を変える。持っていた曲刀を消し体に身体強化をかける。

「なにかするつもりだ」

「そうね。なら、一気に決めるわ！」

男が正面から炎球を放ち、女は男のすぐ上から同時に矢を射る。矢は炎球に飲まれ風になつた。それにより炎は巨大化し目の前の俺を飲み込もうとする。

「ふつ！」

俺は躊躇することなく目の前の炎に飛び込む。そして炎に飲み込まれる。

「呆氣無いわねえ……」

「確かに……」

二人は武器を下ろし炎から背を向けた。

「アツツ～……」

俺は真正面から炎を突き抜け一人の後ろに着地。そして首に手刀を当て容赦無く首の骨を折つた。

「悪いな……死ぬわけにはいかねんだよ」

一人の屍を背に4番倉庫を目標指す。

倉庫にたどり着き扉を開けるといきなり電気を浴びた。

「ほお……。氣絶しなかつたか」

「なかなかに丈夫だね 」

「電力不足」

地面を強く踏み電気を逃がし前を見ると真ん中には斧を持つた30代の男。右には鉤爪を付けたガイルぐらいの子供。よく見ると鉤爪には電気が流れている。そして、左には感情がない20代の男が立っている。奇妙なのは両足にホルスターが付いている。

「誰さん？」

三人に問いかける。

「僕はカヤリ」

「俺はユログ」

「ノーラ」

「そ。俺はレンホ

自己紹介をしようとしたがノーラが何かを投げてきた。後ろへ跳び避けようと思ったが、後ろは壁。そのため上に飛び、避ける。が、地面から氷が飛び出してきた。

氷をなんとか避け着地する。

「攻撃失敗。次行動に移行」

ノーラの足のホルスターからは棒手裏剣が見えた。

「次は俺だ。オラアアア！！！」

ユログは斧を地面に叩きつけ、直線上に衝撃を放つてきた。

「（大地脈動に似てるな）」

そう思い横に飛び避ける。そして衝撃を放つ。

「僕もいるよー！はつ！！」

カヤリが鉤爪を前に出し電気を放つてきた。

「ぐつ！」

衝撃はカヤリの爪で消されそれから放たれた電気は俺に直撃。

「攻撃」

「おらよつーーー！」

ノーラは棒手裏剣を投げ、ユログは上に飛び斧を振り降ろしていく。

る。

俺は合剣を出し一人の攻撃を防いだ。しかし棒手裏剣は空気中の水分を凝固させ氷の弾丸を撃ちだしてきた。

「カヤリ。稻妻」

「オッケー！」

ノーラが作り出した氷の弾丸はカヤリの稻妻の触媒に使われた。そして巨大な稻妻を俺に落とした。

すさまじい轟音が鳴り響いた。

「殺つたか！？」

「さあ……。でも殺したら【造れない】よ？」

「生命反応数3。……不覚」

あたりに静寂が訪れる。

「この野郎……」

瓦礫の中からはいでた俺は体勢を戻す。が、かなりのダメージが体に蓄積されていて立つことが出来ない。

「まだ生きてるじゃねえか」

「そうだね。丁度よく弱ってるし連れていくつ」

「同感」

ノーラは俺を引きずりあの人体実験場へと入つていく。

第31話・苦戦（後書き）

いろいろな評価、感想をお待ちしております。

引きずられて人体実験場に来た（来させられた？）俺は奥に投げ捨てられた。体を戻そうとするがむちきの稻妻のせいでいつ伏せのまま動けなかつた。

「じゃ、【造る】か

「そうだね」

奴等は【造る】と言つてゐるが俺にはなんのことかわからなかつた。

「造るってどうことだ？」

「お前犠牲。魔導武器生成」

聞きたくない言葉が返つてきた。つまりこゝは魔導を使える人間を犠牲にして魔導が使える武器を造るらしい。（やられてたまるかよ……）

3人に聞こえないよつに呟く。そしてなんとか立ち上がる。もはや意識すら危うい。

「まだ生きてた？」

「死んでたらダメだろー」というかまさか立つとはな……

「……同感」

3人は驚きの表情を隠せていない。そんな中、俺は静かに詠唱を始める。

（『眼前に立ちはだかる敵を滅せ……。命奪われし亡者共……』）
詠唱が終わると同時に俺は前に倒れ、動けなくなつた。限界だつた。

「なんだ？ いきなり倒れたぜ」

「限界点突破……」

「精神も限界だつたんだね。これなら造りやすいよ」
カヤリはそう言い俺に近づき、腕を伸ばしてくる。が伸ばしたそれは俺に当たる少し前で消滅した。

「カヤリ！離れろ！」

ユログの声が響きわたりカヤリは体をビクッとさせ後に飛び退いた。だが消された腕が戻ることはない。

「なに？」あれ

「魔導？確信……薄」

「あれが魔導か。危ねえ……が一気にかかれば怖くねえ……」

ユログの声が他の一人の行動のスイッチになつた。3人は一斉に飛びかかつてくる。しかし、その後にあつたものは……。

静寂だつた。

「ん……」

俺はいつの間にか寝ていたらしく体を起こし周りを見る。

「……？」

頭を軽くかき状況を把握する。前にいたはずのカヤリ・ユログ・ノーラがいなかつた。

「まさか殺しちまつたか？まあ、今更3人殺してもおんなじだけどな」

「冗談混じりの独り言を言い立ち上がる。そしてここに置いてある機械という機械をすべて破壊して、俺は外に出た。

倉庫を出ると夕日が田にしみた。あまりの眩しさに腕で目線を隠す。かなりの時間、寝ていたことを感じた。

「ん……。はあ……」

軽くのびをして息を吐く。そんなことをやつているとフェル達が上から降つてきた。もちろん俺は避けきれず3人に潰された。

「あ……。蓮崩」

「お……。ホントじや」

「何してるの？あたしたちの足元で」

自分達が俺を踏んだことに対する弁明はなかつた。

「……別に。て言つたか、重い」

3人に乗られ俺の肺は潰れそうだった。3人は俺から降りると前を見据えていた。そこにいるのはキヨウリム・ネルス。

「おやおや。蓮崩様ではございませんか」

「「キヨウリム！」」

俺の声と聖の声がハモった。俺は驚き、聖を見て問いかける。

「なんで知つてんだ？」

「あんたが消えた日の放課後にあつたのよ。あたしを吹き飛ばすというおまけ付きでね」

怒りを押し殺したように話す聖に対して俺は怒りではなく疑問が溢ってきた。

（じゃあ、奴は世界を自由に行き来できるつことか？　だとしても、どうやって？）

考へているときにキヨウリムは話しだした。

「せつかくの研究所も壊されてしましましたね。では、私は祖国に帰るとしましょう」

そう言い後ろを向くキヨウリム。だが

「そうだ。蓮崩様？」

「！？」

急に名前を呼ばれ、驚く。

「いざれあなたは真実の扉の前に立つでしょ。しかし、真実はあまりにも……」

何かを言いかけるキヨウリム。だが無理に聞こいつとは思わなかつた。そして奴の一言は……。

「奇妙ですよ？あなたの運命は少しづつ狂っていますのでね。」

そう言い残し彼は空間を裂き消えた。俺は、いや俺達はその後家族として暮らし始めた。

だが、未だに【真実】の扉は表れない。けれど、今はこの幸せを楽しもう。新しい【家族】と共に……。

最終話・疑惑 真実 終結（後書き）

これで終わりです。

なんか歯切れが悪いんですけど・・・

応援してくださった読者の皆様、本当に有り難う御座います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7453a/>

非現実の現実

2010年12月12日02時48分発行